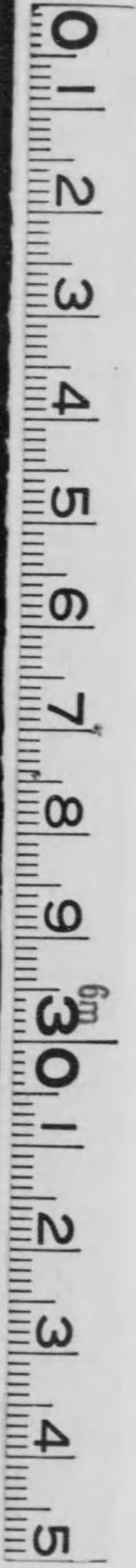




304
H667



始



362-115

304
H667



早稻田大學長

平沼淑郎著

社會思想及社會組織の研究

日新閣出版

大正
8. 8 4
内交



序

現今は世界改造の時期なり。これ思想の轉遷、社會の變動のためにあらゆる方面に於いて新たなる建設を見んとしつゝあるによる。頃者菊池曉汀君來り余が教務の餘暇講演に或は雜誌に公にせるものを編輯し、一卷として世に公にせん事を請はる。余が論述素より識者の一顧に假せず、また編中收むる所或は陳套に屬するの恐あるものなきに非ずと雖も社會研究者に幾分資する所あらばと、君が意に任すこといせり。乃ち一言を卷首に録す。

大正八年六月

平沼淑郎

卷首に

本書は本邦經濟學界の泰斗たる平沼博士が、多年の蘊蓄を傾盡して社會思想及社會變遷に就いて雜誌に講演に公にせられたるものを、余が得るに随つて編輯したるものなれば、各編條貫を缺けりと雖も、社會問題研究者の好箇の資料たることはこれを疑はず。

今や世界は改造の危機に瀕し、社會は幾多の波瀾曲折あるべし。この時に當り本書はこれ等各種の問題に對し適確の解決を與へ、歸嚮する所を教ふるに庶幾からん。刻成りて茲に一言を述ぶると共に、博士が本書の刊行を諾せられたるを謝し、併せて編輯に關する責任はすべて余に屬することを明かにす。

菊池 曉 汀

社會思想及社會組織の研究

目次

其一 世界の大勢回轉の第一幕

- 一 世局時變の第一期
- 二 世局時變の第二期
- 三 世局時變の第三期
- 四 世局時變の第四期
- 五 天下の統一と中央集權
- 六 第一期より第六期迄の大勢
- 七 世界歴史の縦斷面
- 八 社會の着眼點と經濟の問題
- 九 世局轉變の機運成熟期

其二 世界道德の變動と經濟との關係

目次

一

(二六)

一 道德思想の變動……………(二六)

二 思想變動の導火線……………(三一)

三 日露戦役は歐亞の衝突……………(三三)

四 宗教及道德思想の大變動……………(三七)

五 世の中の組織の變遷と道德の危機……………(三九)

六 道德の危機と恬淡主義……………(四二)

七 頑迷破壊……………(四四)

八 社會の體制と時代精神……………(四五)

九 投薬も癡機催進に限る……………(四七)

其三 日本と歐羅巴の社會發達の比較……………(五〇)

一 彼我商業の比較……………(五〇)

二 日本民族と獨逸民族の姓氏と王室……………(五一)

三 文明輸入の徑路比較……………(五二)

四 王室の衰微比較……………(五四)

五 僧侶の權力増大の比較……………(五六)

六 封建の比較……………(五七)

七 中央集權の比較……………(五九)

八 社會革命の比較……………(六一)

九 日本と歐羅巴との唯一の相違……………(六二)

一〇 西洋は先進日本は後進……………(六三)

一一 中古の日本商業は西洋に勝る……………(六四)

一二 外國交通と海賊……………(六六)

一三 海外貿易の目的の比較……………(七一)

一四 重商主義の比較……………(七二)

一五 貿易政策の比較……………(七三)

一六 勝手貿易を許さざる比較……………(七六)

一七 外國貿易を虐待したる比較……………(七八)

一八 内地商業の比較……………(八二)

一九 都府と商業の發達比較……………(八三)

二〇 經濟狀態の發達變遷……………(八五)

二一 中古に於ける日本の市制……………(八六)

二三 問屋の發達……………(九二)

二三 兩替業爲替業の發達……………(九三)

二四 中古に於ける泉州堺と歐洲都市との比較……………(九五)

二五 金融と株式組織の比較……………(一〇〇)

二六 組合組織の發達……………(一〇二)

二七 組合と專賣特許權……………(一〇四)

二八 組合は納税の單位……………(一〇八)

二九 商業發達と一定の原則……………(一〇九)

其四

革命の徑路

一 諸國の革命……………(一一三)

二 叛亂と革命……………(一二五)

三 革命と社會の根基……………(一二九)

四 姑息の手段は不可也……………(一二一)

五 社會の權衡と社會問題……………(一二五)

六 社會の權衡を失する場合……………(一二八)

其五

今は世界の亂調期

七 權力の濫用……………(一三一)

八 權力の行使……………(一三五)

九 社會の變調……………(一三九)

其六

日本民族發展の徑路

一 道德の破壊……………(一四三)

二 三種の現象……………(一四五)

三 思想の變遷……………(一四九)

四 新舊思想の衝突……………(一五〇)

五 思想變遷の第三期……………(一五一)

六 文明東漸……………(一五三)

七 亂調は益々亂調……………(一五四)

八 二十世紀と世界……………(一五五)

九 社會の活力……………(一五六)

一 日本人の發展と諸家の意見……………(二六三)

二 日本人の海外發展……………(二六七)

三 日本人の海洋發展策……………(二七一)

四 大陸方面の發展……………(二七七)

五 千歳の悔を貽す勿れ……………(二八〇)

其七

漢學と東洋思想……………(二八二)

一 趣味津津……………(二八二)

二 當然の義務……………(二八九)

三 雄大なる思想……………(二九〇)

四 實地の學問……………(二九二)

五 原子論……………(二九五)

六 東西哲學の比較……………(二九八)

其八

政權分配と經濟的關係……………(三〇四)

一 三段の變遷……………(三〇四)

二 政權分配と權力轉移……………(三〇七)

三 勞銀制の時代……………(三〇九)

四 政治組織の一定の變遷……………(三一〇)

五 奴隸制及隸屬制……………(三一二)

六 政治範圍以外……………(三二四)

七 行政及司法に對する資産家の勢力……………(三二六)

八 司法權の行使と經濟關係……………(三二七)

九 勞銀制と經濟組織……………(三三一)

一〇 現代の經濟制……………(三三三)

一一 時勢に伴ふ弊害……………(三三五)

其九

國際法規の權威……………(三七七)

一 英國宣戰の大なる導火線……………(三七七)

二 中立國の由來……………(三八八)

三 中立權侵害……………(三九〇)

四 中立權侵害の理由……………(三九二)

五 名分の正しき所置……………(二三二)

六 國際法規と世界の公道……………(二三四)

其一〇 貧富の經濟的研究

(二三七)

一 救濟制度……………(二三七)

二 生計困難と富豪の兼併……………(二二九)

三 經濟上の變遷……………(二四〇)

四 一家生計費と收入の最低額調査……………(二四三)

五 一戸の富力平均……………(二四四)

六 社會問題の中心點……………(二四五)

七 貧富の問題……………(二四六)

八 社會論の價值……………(二四七)

九 貧民とは何ぞや……………(二四九)

一〇 家計の維持……………(二五〇)

一一 狹義の解釋……………(二五二)

一二 科學的の定義……………(二五三)

其一一 藝妓亡國論

(二六七)

一 統計上より見たる藝妓……………(二六七)

二 待合茶屋と藝妓屋……………(二六九)

三 藝妓と公娼との關係……………(二七三)

四 藝妓の表裏觀……………(二七四)

五 藝妓は亡國の媒たり……………(二七六)

六 藝妓も公娼も差等なし……………(二七六)

七 亡國者の名を呈さん……………(二八〇)

八 それぞ亡國の兆なり……………(二八五)

其一二 戦後の東洋

一 歐羅巴交戦國の状態……………(二八九)

二 公債の整理……………(二八九)

三 財産の評価……………(二九三)

四 通貨の問題……………(二九四)

五 物資の補充……………(二九八)

六 物資の要用と東洋……………(三〇三)

七 日本が占むべき地位……………(三〇四)

八 戦後の關係と日本の地勢……………(三〇六)

九 戦後の工業の生産……………(三〇九)

一〇 天然物供給と支那……………(三二二)

其一三 文明改造の經濟的方面

一 デモクラシーの歴史……………(三一五)

二 民本的思想の發達と訓練……………(三七)

三 宗教上と政治上の民本主義……………(三一)

四 上古中世迄の經濟生活……………(三四)

五 近世に於ける經濟的變動……………(三六)

六 經濟上より來る道德の變化……………(三九)

七 營利經濟は機會不均等……………(三二)

八 民本主義と節制訓練……………(三四)

目次終

社會思想及社會組織の研究

法學博士 平沼 淑郎 著

世界大勢回轉の第一幕 一 世局變轉の第一期



余常に以爲へらく、世局は時々小變あり雖も、その大勢は約五百年を以て一回轉をなすと。抑々事物の爲に現るゝや、相互連引交渉して、係累する所前後錯綜し、確然識別をなすこと固より難し。然れども、時勢の大變に就いて本末早晚を照し氣脈源委を考ふるときは、大略五百年を一紀となすに似たり。伊勢度會の五十鈴の川上を相定して天照大神の祠を建てたまひしは、國史に於いて國歩屢々百度振興の

期を劃す。これ西洋文明の根源をなせる基督の紀元と略時を同じうす。これより先五百年間は、釋迦牟尼印度より出て、佛法を宣傳し、孔老支那より出て、儒道兩教の基を開き、ソクラテス、プラトン、アリストートルレス等希臘哲學の妙奧を發揮し、思想は漸く系統を立て條貫に就きぬ。支那は戰國を経て秦の一統となり、漢武帝廣東征服匈奴討伐の後を承けて四方を經略し、間接に羅馬に通ぜり。羅馬は希臘の併合せし諸邦をこし、勢力歐亞比に及んで、オクタヴィアス帝政の基礎を確立せり。これ第一期なり。

二 世局時變の第二期

漢の天下漸く衰へて、王莽の篡奪となり、三國鼎立の後司馬氏一時帝と稱せしも、鞭韃諸族の侵寇その跡を絶たず、北方は遂に托跋氏の有に歸し、統治二百年の久しきに及べり。羅馬が分れて四國となり、コンスタンチン帝の統一と前後して蕃族の來

襲踵を接し、ヘルリ族の會オドアサー西羅馬帝國を亡し、自立して伊太利王となりしと何ぞ事蹟の酷似せるや。基督教は羅馬帝領に入つてより、異教の壓迫止る所を知らず、而して遂に勝を制して歐洲の宗教なるの根基を開拓し得たり。佛教が教線は夙に五印度、波斯、バクトリア、錫蘭、緬甸に擴張し、阿輸迦王の保護コンスタンチンとその趣を同じうし、佛光數千里の内外に輝き、基督紀元より百年ならずして支那に入り、晋に至つて諸派皆傳はり、朝鮮日本その傳統を繼承せり。これを第二期とす。

三 世局時變の第三期

回教の祖マホメットの生れたるは紀元後五百七十一年なり。七世紀に至つて道を唱へ、亞刺伯の全部を風靡し、サラケン帝國の偉業を創建し、後サラケン人をしてイペリア半島に進入せしめたり。當時羅馬帝國は崩壊して權力蕃族に歸し、文明は類

廢して所謂暗黒時代を現出せり。この時に當つて學術技藝はサラケン人の占有に歸し、人智廢退の世に在つて文明の機運を維持し得しはその賜たり。カール大帝紀元八百年を以て新西羅馬帝國の帝位に上り、西歐は日耳曼王の治に屬し、オット大王また日耳曼より出て、神聖羅馬帝國の基を立てき。然れども國は既に分裂して現代諸邦の成立を促しつゝありしなり。支那は托跋氏の世々々沙漠の地に起り、匈奴の殘黨を平げ、托跋氏の權衰ふるに及んで突厥蠕々と衝突し、隋の楊堅諸族を平げ、始めて日本と國際關係を生ぜり。安南暹羅また好を通じたれども、西突厥境を扼して斯波印度の通路を遮阻せり。唐起るに及んで突厥力を失ひ、高麗服屬し、安南朝貢國の班に列し、佛林の名漸く傳はる。これ歐人なり。突厥の勢を支那の邊疆に失ふや、その族土耳其格漸く起り、後世歐洲を蹂躪せんとするの素地を作れり。これを第三期とす。

四 世局時變の第四期

回教既に勢力を逞しうして歐洲の土に入り、土耳其格また漸く力を養ふ。歐亞の衝突は免るべからず。次の五百年は實に東西の争闘を史乘の特色とす。

歐洲民族は基督の靈地を土耳其格人より回復せんとして、十字軍を起し、各國の諸侯相連衡して、一〇九六年を以てその地に向ひ、爾來兵を交ふること二百年に垂とし、軍を起すこと七回、目的を達すること能はずして止みきと雖もその結果關係の重大なる史家をして宗教改革及佛國大革命に比せしむ。歐洲の社會もと豪族の蟠居を基とし、軋轢争鬪寧日なく、これと時を同じうて發達したる我が莊園封建の世とその趣を一にし、共同責任のよくこれを連結するなかりしが、人心の歸嚮こそ、に至つて一變し、東洋の學術技藝は歐人の智識見聞を擴充し、亞細亞の珍寶奇品は商業の發達を淬勵し、物質精神の進歩振作に貢獻せし所決して僅小ならず。支那は

宋の世、蒙古北邊より起り、歐洲の中部に侵入して心膽を寒からしめ、露士亞を蹂躪すること二百年、殆どこれを蒙古化し、中亞細亞を勢力圏内に收めて、餘威印度に蒙古大帝國を建設し、支那に在つて遼金を亡ぼし、宋を追窮し、遂に四百餘州に君臨せり。マルコ・ポロー忽必烈に仕へて絶東の事情を傳へ、歐人の奮起を促し、西力東漸の嚮導をなしたるは時勢回轉の因由を説くに當つて看過すべからざる所とす。これと期を同じうして土耳其は歐洲の諸地を侵略し、一四五三年に至つて君士但丁城を陥れ、東羅馬帝國を滅しき。これ實に世界の大變にして、回轉の一期を劃するものたり。サラケン人の傳へたる輿地の知識航海の技術は葡萄牙人をして航路發見の大業を起さしめ、西班牙人をして絶大の侵略征服を敢てせしむるに至れり。ヴスコ・ダ・ガマの東印度交通、コロンバスの西印度諸島發見はセバスチアン・カボットの亞米利加大陸發見と相待つて世局の變遷を促進するの偉業たらずと謂はんや。これを第四期とす。

五 天下の統一と中央集權

日本は前期中歐洲と同じく群雄割據の世に屬し、鎌倉幕府の開設漸く莊園社會を變じて知行の世態となし、封建の制度これより具備するに至りきと雖も、世は群小爭奪を眼目とし、以て足利氏の季世に迄り、その始めて葡萄牙より鐵砲を傳へたるは天文中に在つて、葡萄牙が總督を以亞に置き、盛んに東印度、馬來支那の經綸を行ひし時たり。マガルアエス亞米利カの極南端を回航してスバイス群島に至り菲律賓を發見し、西班牙の南洋貿易をして日に月に盛大ならしめ、葡西の航路獨占は蘭英佛をして別に計畫する所あらしめ、世界の大勢は小天地に踞踏するを許さざるに至りぬ。これ時勢回轉の大なるものに非ずして何ぞや。こゝに於いてか西力の東漸を來し、東洋侵略の政策を生じ、各邦相敵視して軍費の充實を謀らざるべからざる必要は愈々益々歐洲の強國をして遠方に遺利を求むるの策に出でしめ、太平の夢

る北米合衆國もまた西南に領土を擴張し、落機山西の地を得るや、支那日本を窺へり。露士亞また中央亞細亞、西伯利亞、勘察加を經略し、十九世紀に入りて英米佛の諸國と共に通商を迫りき。日本は幸にして世界の大勢に背馳せずして今日の形勢を馴致しきと雖も、支那は明末清初より以降常に歐洲の逆流に抵抗せんとして、地を割き邦を興へ、今なほ海關行政の權を歐人の手に委したり。世界の大勢は常に西力東漸の一方に傾注し、濁流滔々亞細亞の天地を震盪せんとするに至りぬ。

中央集權は君主專制を生みぬ。英邁の主深謀の臣國を治め政を執りし間は國力の進歩事業の發達觀るべきもの頗る多く、稱して光輝赫々たる專制政治と曰ひきと雖も、世漸く闕にして弊害百出するに至つて、權貴威福を擅にし、民庶塗炭に苦しむに至る。こゝに於いてか、革命は起る。一七八九年の佛國大革命、一八四八年の革命、これに先つて一六八八年の英國革命皆舊弊を洗滌し、新制を建設するに非ざるはなし。我が邦の明治維新またこの列に加はるべきなり。これよりして國

民の輿論は政策の實施に重きを加へ、愈々益々利を海外に求むるの書策を盛ならしめ、以て今日に至りぬ。これ世局變遷の第五期に屬し、一五〇〇年代より第二世紀の初期に至るの概觀なりとす。

六 第一期より第六期に至る大勢

第二十世紀に至るまでの形勢かくの如し。その變遷を通觀せば、大勢は常に歐亞の接觸衝突によつて回轉せることを知らん。第一期は交通殆ど無きに似たれども、その裏面を探究せば思想は間接に相影響せるものありとは史家の承認する所たり。今の芬蘭人やバスク人や東洋民族の遺孳にして、その早く既に歐洲大陸に澎湃汎濫せしを證す。希臘羅馬の文明は現代西洋文明の淵源精華たり。而してその埃及メソポタミアの文明に負ふ所多大なりとせば、間接に印度支那の文明と關涉連繫する所なしと謂はんや。基督の教は亞細亞に起つて歐洲を風靡感化し、マホメットまた亞

細亞より出て、その教徒は西洋の天地を掃盪せんとするの勢ひを示しき。これ歐亞の接觸に非ずして何ぞや。基督の教は既に歐洲に根據を定め、新來の亞細亞宗教と接觸す。何ぞ衝突を免れんや。第一、第二、第三の三期は接觸の時代に屬して衝突の素因を作り、第四期に至つて大勢は遂に衝突を實現し、東西の文明は錯綜混淆して、物質と云はず、思想と云はず、波動影響の及ぶ所決して僅少ならざりしなり。第五期に至つては發展の大勢逆轉し、怒浪狂瀾は層々疊々として東洋の諸邦に漲溢せり。この期の終末日清の戰爭は朝鮮の獨立を保障せんとして起り、露國の南下突進を拒遏するはその究竟の目的なりしを思はば、こゝに東西衝突の端を發するに至りしを知らん。宜なるかな、歐人は日本の侮るべからざるを覺知して、黃禍の説を頻發するに至りしや。

東洋より云はば、第五期は白禍横溢の期なり。而してその終期に至つて却つて黃禍の聲を聞く。時勢逆轉の兆ならずとせんや。第二世紀は大勢回轉の第六期を開

始せり。その初期は日露の衝突期に屬し、太平洋の沿岸に突出せし露國の勢力はこゝに頓挫挫折し、日本の勢力は却つて西方に向つて進出せんとするの徴候を呈しき。余嘗て思へらく、第五期中に東洋に澎湃汎濫せる怒浪狂瀾は日本の海岸に觸激して碎破せん、東洋に怒號扶搖せる瘴癘暴風は日本の山脈に衝突して逆轉せんと。怒浪狂瀾日本を越ゆれば太平洋に出て、米國の海岸を洗ふの外なく、瘴癘暴風日本の山脈を踰ゆれば、米國の國土に鳴るの他に途なし。米國は既に歐洲の文明を扶植して、またこれを輸入するの要なし。觸激して破碎するもの、衝突して逆轉するもの必ず錯綜混淆の波動影響たるべきなり。事實はその兆を呈せり。日本の邦土に横溢し來りし西洋の勢力はその吸収融和する所となり、新興の制度文物は西漸せんとするの徴候あるに非ずや。西洋の制度文物を採酌して成れる立憲政治は支那の革命を促し、波斯の政體を改め、土耳其の舊制を破り、專制獨裁の本土たる露國をしてデッマを開き、政を輿論に問はしむるに至りぬ。西力東漸の趨勢は叢爾たる日本に至るに及

んで頓挫し、却つてその大陸發展の微證を示せるに非ずや。今次の動亂に於いては、間接に歐洲の政局に参加す。勢力逆轉の序幕を演ぜるの感あるなり。これ東西の勢力新に接觸の途を開き、後の數百年に於いて衝突觸激するの前兆なり。怒號扶搖し澎湃汎濫すべき風濤の警報なり。勢力逆轉の序幕に於いて演ぜし所かくの如し。これより起る所の活劇は歐亞兩人種の衝突觸激にして、そのいづれが勝を制し敗を告ぐるかは第二世紀より數百年後の問題に屬し、今に於いてこれを豫知し難しと雖も、第六期の舞臺は黃白の競争に歸着すること事實の趨く所を觀察せば察知するに難からざらん。

七 世界歴史の縦斷面

黃白の競争は大勢回轉の一面なり。これ世界歴史の縦斷面なり。縦斷面の轉遷は必ず横斷面の史變を伴隨す。これ深く察せざるべからざる所とす。想ふに横斷面の

史變はこれを三期に別つべし。宗教政治經濟これなり。いづれの時か宗教なからん。政治なからん。また經濟なからん。社會の推遷を促すもの三者相連繫し相關涉して、これを區劃すること固より不可能事たり。然れども世事の推移は時代の早晚人事の本末により重きを置くの點を同じうせず。或は宗教を眼目とし、或は政治を標的とし、或は經濟を主動力となす。皆時勢によつて異なりとす。

人類の蒙昧にして未だ事理を融會貫通せざるときは、唯神意を畏怖して事に當る。故に行動舉止悉皆宗教的ならざるはなし。稍進んで沈潜反覆事物の蘊奧を究め開發する所あるも、遺傳の然らしむる所、詭奇譎怪の譚を信じ、微を透し闇を照すの途を講ぜず、異論を惡むこと蛇蝎も曾ならずして、苟も教旨を同じうせざるものは相容れ相許すことなし。國定の宗教保護を受け特典を専らにして、異教を排斥して、良心の自由を許さず、ために腐敗鼻を掩はざるべからざるもの一方に巍立して、清潔の徒或は墊伏の苦を忍び、或は縲紲の辱を受く。然らざるも、異教の徒相凌ぎ

相争ひ、天下寧日なかりしは史乘に炳然たり。第一期より第二、第三、第四の三期を通じて、宗教の争奪は歴史の紙面を充塞するの一大事件に屬し、中に就きて蘇回兩教の衝突は世界大勢の轉遷に關聯せり。而して宗教の勢力頗る旺盛なるときは、俗流は僧侶に歸依して、その徳の高下を問はず。良心の發達益々遲緩して、大勢に順應するの力愈々窮乏す。こゝに於いてか宗教改革の運動を生じ、宗教の自由漸く伸張す。羅馬教會の弊害百出して、ルーテルの運動は農民の困厄に乗じて起れり。

良心自由の確保漸く成つて、政治の運動これに次ぐ。第五期に至るまでは、群小割據して生殺與奪の全權を把握し、民に自由權利の存することなし。税政踵を接して而して民訴ふるに處なく、誅求催討至らざるなくして而して民苛に堪へざるべからず。中央集權の制度整備して、政府民福の増進を以て利益となし、殖産興業を勵まし、仁政の見るべきもの往々なきに非ず。これ器械錢糧乏しきものは戰に破るるが故なり。君主侯伯政術を務め蓄積をなし、意を經濟の發達に用ふるに至りしは

これがためなり。貿易の利を興し海外の交通を盛ならしめしはこれがためなり。こゝを以て勵精治を圖りしものは黔首の苦痛を自撃する所少かりきと雖も、特權は獨權貴豪族の手に存し、下民は政務に參與するの權能なかりしを以て、少數の權豪威福を恣にし專横を極め、戰鬪は私利を經營するの具となり、政治は特權を防護する用をなすに止り、四民の幸福安寧は直接の目的に非ざりしなり。これ良心の自由に次いで、政治の自由を發揮するに至りし所以なり。一六八八年の革命は英國憲政發達の一期を劃す。一七八九年の佛國大革命は階級を打破し特權を掃蕩し、四民の心眼を洗滌刷新して餘蘊なく、舊時の典章を塗鴉抹殺して完膚なからしめき。一八四八年の革命を経て立憲の政治は漸くその緒に就きぬ。明治の維新またこれに異ならざること前文に述べたり。階級の打破社會の改造を経て、立憲政治はその端を開きぬ。少數の專權未だ全くその跡を絶たずと雖も、時日はおのづからこれを解決すべし。第五期は實に政治改良の時代に屬す。

八 社會の着眼點と經濟問題

宗教の自由及政治の自由は既に解決の緒に就きぬ。第三に社會の着眼點となりしは經濟問題なり。第五期は既に社會の面目を一新し、また昔時の影響を留めざるに至りきと雖も、經濟の壓迫はまた往日の比に非ず。往昔の座制は革命維新と共に廢滅に歸せしも、機械工業の發達と大規模營業の振興は資本と勞動との懸隔を誘致し、漸くその衝突觸激の兆を呈するに至り、社會改良の聲これより漸く喧然たり。第二十世紀に至りて、貧富の懸絶、資本勞動の反目愈甚だしくして、早晚經濟の刷新を來すべきの徴候を示せり。或は私有財産を撲滅して共同財産とせんとする社會主義者あり。或は財産を全滅して各自に均分せんとする共產論者あり。或は資本と争闘して天下を勞動者の有に歸せんとするサンディカリズムあり。社會の現制に慍焉たるもの陸續輩出し、世局の轉變漸くその端を啓かんとせり。

社會改革論の可否はこゝに論ずるの要なし。然れども、今や勞動者階級は漸次その地位責任を自覺して、團結を鞏固にし、以て向上せんとし、從來の如く社會の同情慈善に訴ふることなくして、實力を以て正當の利益權力を取得せんことをこれ勉むるに至れり。こゝに於てか、社會は資本勞動の階級戰爭を見んとす。然れども、資本の勢力はなほ依然として舊態を存し、政治の狀態社會の事業はその左右する所となり、勞動階級は殆んど發言の權利なし。固より勞動黨の代議士を國會に見るなきに非ずと雖も、少數に止まつて、天下の形勢を定むるに足らず。資本家の好惡嚮背は天下國家の命運を制するの力を有し、世界各國の表面に現出せる事業は實はその意志に出でたるもの少しとせず。

戰爭は何のために起るか。君主專制の世、少數の權貴權力を把握し、戰爭を以て野心を充すの具となすもの多し。事の發する萬民の休戚に關するよりも寧ろ權貴の利害に係はるものあり。今や資本萬能の時なり。故に各國争つて資本を投ずるの途

を講ず。抑も資本の向ふ所は金利の高きを擇ぶ。猶水の卑きに就くがごとし。國古うして富力充實するときは金利低廉にして資本家の欲望を充足すること能はず。植民地は文運未だ發達せず、富源未だ開發せず。故に金利は内地に比して高し。これ資本家が世界政策を懲憑して、屬邦を得拓植を奨めんとする所以なり。こゝを以て歐洲諸國が孜孜汲々として海外の發展を畫策し、動輒爭奪をこれ事とせんとするに至るは、資本の勢力これを然らしむと謂ふも決して過言に非ず。政府を動かす國民を勵まして列國競争の場に馳驅せしむるもの實に資本の活動なり。故に労働階級は痛痒を感じずして、寧ろ戦費の負擔を嫌厭するの傾向を示す。日本の臣民は忠愛の至情に富み、大詔煥發直ちに劍を抜き銃を執り、甘んじて死地に就く。然れども、歐洲の労働者は自己の地位を覺知すると同時に資本萬能の正當ならざるを唱道し、戦争は資本家の利益を増進し労働者の損害を招致するものなりと思惟するもの漸く多きを加へき。これ政治自由の主義傳播して立憲政治の基礎を確立し、宗教改革の

運動熾盛にして良心自由の原則を制定せしと同じく、經濟上に於て大勢の回轉を來すの兆に非ずして何ぞや。

九 世局轉遷の機運成熟期

かくの如く、これを縦にしては黃白兩人種の衝突を促さんとし、これを横にしては資本労働の觸激を見る。縦横兩面早く已に世局轉遷の徴候を呈す。第二十世紀以後に於て機運成熟の期あるべきは察知するに難からずと信ず。

今や歐洲民族の爭奪は未だ黃白衝突の本舞臺に活劇を演ずるの場合に至らずと雖も、その第一幕を開けるを知る。何を以てこれを言ふ。今次の戦亂は人種の戦闘に因由す。日耳曼民族は汎日耳曼主義を抱持し、スラヴ民族は汎スラヴ主義を唱道し、米國もまた汎亞米利加主義を以て活躍を試みんとせり。凡そ國家人民の團結は初めは小天地に跼踏し、漸を以て活動の範域を擴張し、遂に一大團を結成するに至る。

これ人事世局の順序なり。國初は氏族の團結血屬を以て成り、莊園封建の世群小割據して小社會を組織し、發達して大國家を形成す。大國家既に成りて、人種の聯合生ずるは、小より大に及び簡より繁に入るの順序に由るなり。進化の原則これを證して餘あるに非ずや。世局變遷の事跡はこれを察知せしむるに足らずや。これに由つてこれを推すときは、人種の聯合漸く成るときは、全歐の民族相結んで一團をなし、黃白二大民族の衝突を來すの漸をなすに至るべきは推察に難からず。歐洲の人種相争闘するは他日利害の一致點を看出して共同の敵に當るの端緒なり。十字軍の壯舉は群小牆に閱ぐの風習を打破し、文明の進歩を促し、は以てその證とすべし。英勝つか獨敗るか。余は得てこれを知らず。然れども、人種團結して相争ふの狀態は既に戰亂の局面を擴大せしこと昔日の比に非ず。今後これを黃白兩人種の衝突に及し、多々益々關係の範域を擴張するの期なしとせず。これ今次の戰亂が黃白の戰爭を醸成するの第一活劇にして、世界大勢の回轉を來すの第一幕なりと謂ふ所以なり。固

より人事の推移は曲折波瀾あつて而して後定まる。黃白の大衝突を見るに至るまでには幾多の變態異狀を呈するは勿論なり。

一方に於いて黃白兩人種の衝突を來すべき兆あると同時に、歐洲の社會狀態及經濟事情は他の一方に於いて大勢の回轉を促しつゝ、あるを忘るべからず。平時に於ける軍備費の負擔は既に自覺せる労働者の懊惱を來せり。戰爭は資本の利益に歸して労働の損失を招ぎ、戰爭の原因世界政策の發展に在るは資本活動の然らしむる所、労働者社會の與り知る所に非ずとの觀念は、到る處に瀰漫して世變の機運を促進せり。平時に在つて既に然り。況や戰後財政の困難は國民の負擔を増加し、苛税は益々苛を加へ、窮境は愈々窮境に陥るの狀態を呈出すべきに於てをや。世局これより多事ならんとす。

今次の戰爭未だ爆發せざるや、列國軍備の擴張に従事し、露國は獨逸の國境に兵備を集中し、日露戰役の創痍癒ゆるを待つて發せんとし、獨逸は東境に堡寨を築き暫

壕を造り、年々兵備を盛にしてこれに備へ、四十年前來復讐の念已まざる佛國の攻撃を豫防し、また近來資本の發達に伴隨する世界政策の發展は英國と競争するの已むを得ざるに至り、陸海の軍備年を逐うて膨脹し、國民の負擔日に月に重きを加へたり。その他英と云ひ佛と云ひ伊と云ひ、列國利害の衝突は多々益々軍備の擴張を促し、軍備反對の熱は年々に熾なり。而して反對の熱は階級戦争の伴隨物にして、資本労働の觸激衝突は戦争の熱を減ぜしめんとす。これを聞く、英國の戦を宣するや、國務大臣中職を辭せしものあり。これ労働黨の主義を維持せんとして、擧ることに出でしものたらずんばならず。今に於て既にこの現象を見る。戦後の經營困難を告ぐるの日は労働黨が益々資本家と衝突し、階級戦争の熱度愈々昂騰せんは火を賭るよりも明かなり。戦争既に開始を告げたるの今日に在つて、擧國一致の方針を破るは労働黨と雖も忍びざる所にして、また熱狂せる國民の前に於いてこれをなすこと能はざるべし。然れども戦争終熄して平和回復するときは横斷面の争闘は激

烈の度を加ふべきや明かなり。これ今次の戦争が大勢回轉の第一幕なりとする理由なり。

これに由つてこれを觀るに、世界の時局は縦斷面より觀るも、横斷面より察するも、大勢を回轉するの趨向は歴然たり。これを大成するの間曲折波瀾幾多あるかを知らず。今次の戦争は實に曲折波瀾の一なり。然れども、勢は既に定まれり。勢の趨く所人力を以てこれを如何ともすべからず。余は人事の推移五百年を一紀とするの斷案を提出せり。第六の五百年を開始せる第二十世紀の今日、日露戦役を序幕として大勢回轉の第一幕を演じ出すに至りしは奇と謂はざるべからず。抑々また人事の推遷固より然るべきものあつて而して然るか。

世界道德の變動と經濟との關係

一 道德思想の變動

史を繙いて見ると、西洋紀元前五百年代前後には、世界の思想に一大變動を興ふべき事件が発生して居る。東は黄河の流域から亞細亞大陸を横斷して、タイパー河畔の地に至るまで、思想の新潮流が到る處に瀾漫して來たのである。支那で、孔子の生れたのが西洋紀元前五百五十一年であつて、其の卒したのが同じく四百七十九年で、其の間に齊だの、衛だの、陳だの、蔡だの、種々なる國に往つて終には本國の魯に歸つたのであるが、儒教の源は實に此の時に發生したのである。釋迦牟尼が眞正覺を爲して、遂に佛教の基礎を大成したのも此の頃である。夫れから、波斯のツォーローアスター教である。是れは紀元前八百年代の創設ではあるが、此の頃ま

だ大いに勢力を有してゐた猶太のエホヴ教も亦、芽を出してゐたのである。波斯は此の時は甚だ強盛なる國であつた。サイラス大王が國王に爲つたのが、紀元前五百三十六年である。また羅馬希臘が漸次開けて來て、西歐文明の起源を爲したのも此の頃である。是れから五百年の間には、亞歷山大大王の征服があり、またアリストートルスの學大に興りて廣く歐洲文明社會の人心を感化した。支那は秦始皇帝が統一を行つたが、思想界の有様が氣に入らぬところからして、遂に詩書百家語を焼き、儒者を坑にすると云ふ大騒が始つた。夫れから遂に漢の武帝の世界的政策を實現するに至つた。武帝の崩じたのが紀元前八十七年で、夫れから漢の世の盛は追々衰へて來た。羅馬の共和政が帝政と爲つたのが、紀元前三十年であつて、其後、基督教が羅馬に入つて茲に道德上の一大危機を生じた。是が思想變遷の第一期として宜しからう。基督教が羅馬に入つてから、思想界の騒動が起つたのは當然の事であつて、新舊の思想が衝突するのは免れ難いことである。しかし結局、基督教が勝を占めて、破

壞したる舊思想の廢墟に新道德を建設し得たのである。即一旦起つた道德の危機は茲に形を變へて回復したのである。羅馬で基督教法を行ふことを許したのがコンスタンチン帝の世で、紀元後三百年代の事である。此の頃は漢土の學問が日本に渡つた頃で、佛教が支那朝鮮を経て輸入されて來たのが夫から後で、是れも道德の危機を生じたに相違ないのであるが、遂に推古天皇の御宇に佛法興隆の詔が出るやうになつて、神儒佛混淆の一變體を建設的に現出するに至つた。今度はマホメットと云ふ豪傑が一種の道を教ふるに至つたので、思想界にまた一つの變化を生じて來た。基督教が羅馬に入つてから、マホメットが始めて道を唱ふるに至る頃までが、大約五百年である。是に至つて又々一部に道德の危機が現はれ始めた。是れを第二期として宜しからう。

マホメットが始めて道を唱へたるは西洋紀元六百十五年であるから、支那では隋の末である。是れから唐の太宗が世界的政策を試み始めたのが、マホメット死去の

前後からのことである。日本は漢土との交通が追々開けて、佛教は益々盛んに行はれ、僧侶が文明事業を擔任するやうな有様になつて來た。マホメット時代から五百年許りの時代を通觀すると、ビザンチン帝國は隆盛の域に達してゐて、而して西歐は猶西羅馬帝國潰裂後の餘殃を承けて所謂暗黒時代の裡に在つた。是れから土耳其人が回教を代表して亞細アの征服を始め、十字軍が起ると、蘇回兩教の思想衝突が現はれて干戈に訴ふることとなつた。是れから歐洲封建時代の思想が出來てきて、道德の運命にも一頓挫を來したのである。十字軍のエルサレムに向つて出發したのが、千〇九十六年であるから、マホメットの時代を距ること約五百年である。是れを第三期としたら宜しからう。

歐洲封建時代はスコラスチズムの哲學や、武士的小説や、ゴス流の建築などが流行した時代で、自ら一種の氣風を作り出して來た。支那は丁度宋の世であつて、文運の最盛な世であつた。歐陽修だの、司馬光だの、蘇轍だの、蘇軾だの、王安石

だの、名が歴史を飾つてゐる時代である。日本は藤原氏の佞佛驕奢が漸次其の弊害を露出して來つて、武族が權力を取るに至る兆候を呈してゐた。是れからまた五百年許りすると土耳其格が全く亞細亞の西部を占領して、其の文明と宗教とを歐洲の地に移植して、半月旗は十字架と相拮抗するに至つて、歐洲人は海路亞細亞に通ずるの已むを得ざることになつて、是れから文明東漸と云つて、亞細亞の思想界に一大頓挫を來すの基を造り出した。是れを第四期としたら宜しからう。

丁度、此の頃が支那で滿洲人の侵入に困つてゐる時代で、所謂北狄と所謂中華との思想接觸を來さんとしてゐたのである。日本は藤原惺窩など云ふ先生が徳川家康に登用せられて徳川時代一流の學問を開くの端緒を爲してゐた。夫れから約五百年足らずで、今度は亞細亞と歐羅巴との大衝突が始まつた。日露の戦ひが是れなのである。是れを第五期として宜しからう。是れからと云ふものは、歐羅巴の人々も大分、夢が覺て來て、段々政治上の改革は勿論、種々なる點に於いて改良を施すやう

になつて來た。例へば露國が此の機に乗じて立憲政治を施行するやうになつたなどは是で、思想界に於ける或る一方が他の一方を壓倒して勝利を制して、茲に道徳上の危機を發生し始めた者と謂はなければならぬ。夫れ許りでなく、土耳其格がやる、波斯がやる、トウ〜思想を日本に供給し來つてゐた支那が日本に倣つて國會を開かんとする世の中になつて來た。東西思想の變化實に驚くべしと謂はなければならぬ。

二 思想變動の導火線

右のやうに歴史上の事實を臚列して見ると、大抵五百年許りで思想界の變遷が著しく現れて來てゐる。即ち、第一期は東洋教の世で、アリストートルの教が光彩を其の間に放つて來てゐる。第二期には、基督教が勢力を扶植して來た。第三期には、回教が出來て來て基督教と對峙した。第四期には、回教が亞細亞の諸部に傳播して、西歐は一種の封建的精神を發作してゐる。第五には歐洲文明の東漸と云ふこ

とが出て來たのである。而して、此の中に就いて最も面白く感ずるのは亞細亞と歐羅巴との接觸衝突が何時でも思想變遷の導火線となつてゐることである。又々、前に云つた事を繰返して説明を加へて見ようならば、第一期には波斯が歐洲と常に接觸してゐるのみならず、亞歷山大王の大征服も亦、歐亞間に互れる一大事件である。是れが東洋の文明を歐羅巴に傳へ、歐羅巴の文明を亞細亞に傳へた大要素であつて、思想上の感化も亦、夥しきことであつたらうと思はれる。第二期は何であるか。基督教はモト／＼亞細亞の宗教である。是れが歐羅巴に渡つて來たと云ふのは取りも直さず歐亞の接觸から起つて來た結果と云はねばならぬ。第三期はドウかと云ふと、回教も亦、亞細亞の地に生れたのであつて、亞刺伯人が左手にコーランを捧げ、右手に劍を持して、歐羅巴亞非利加より亞細亞の東方に其の文明の種子を蒔いて行つたればこそ西洋の文化の上に偉大なる感化を及ぼしたのである。それから第四期になると、基督教と回教の喧嘩である。基督教を遵奉せる西歐の武族と、嘗て支那を

苦しめたる突厥種族の片割で回教を崇信せる土耳其人との喧嘩である。是れが西洋に東方の文明を知らしめ、東洋に西歐の文明を接觸せしめたる導火線である。第五期の文明東漸はドウ云ふ譯であるかと云ふと、是れは歐羅巴人が印度に通航して盛んなる貿易を開始し、段々支那までも侵入して其の鎖國政略を打破し始め、また西方の路を取りて、意なく米國を發見し、此の地を經由して更に絶東に通ずる途を作つたのである。此れ等の事柄を綜合して考へて見ると、世界の大局に大影響を及ぼしたる事柄は亞歐の關係から割出されてゐると云つて不可はないやうに思はれる。

三 日露戰役は歐亞の大衝突

右の譯合からして、日露戰役と云ふ亞歐の大衝突が更に來るべき五百年期の序幕となりて、花々しき活劇を世界の舞臺に演出せしむることゝならんと推斷するのである。或は之れに對して論ずる者があるかも知れぬ。成る程、過去の歴史は、約五

百年許で世局の分界を附けてゐるから、事實として之れを許しても宜しからうが、日露戦役が丁度前の時期から五百年位になるから、其れで戦役以後同じやうに世運の推移があるだらうと断定するのは早計に過ぎはしないかと云ふことである。此非難は誠に尤ものことであつて、唯、漠然と日露戦役以後五百年位は思想界の變移を來すだらうと云つただけでは首肯し難いのも決して無理とは云はれぬのである。しかし、是れには、しか思ふべき道理が別に存してゐるのである。今少しく之れを論じて見よう。

第一に新歐羅巴と新亞細亞とを生み出すべき兆候は歴然として存在してゐるのである。是れは前にも一寸説明して置いた如く、露國と云ふ專制國の大將株が絶東の島帝國から進路を遮阻せられた結果、人民の解放を始め出したのに引續いて、諸國が憲政の施行を始めとして百般の改良進歩を圖るやうになつたではないか。是れをしも世界改進の端緒と云はずして將、何をか云はんやである。歐洲人は黃禍と云ふこ

とを口癖のやうに云ふのであるが、余は誠に眞理の在ることだらうと思ふ。固より歐洲人の云ふ如く、日本人が昔の蒙古のやうに大舉武裝して歐の膏血を吸ひ、歐洲の土地を蹂躪すると云ふ意味で云ふのではない。折角是れまで專制國が維持し來りたる壓制政治に對して、其の所謂道德の危機を來すべき命運を日本の戦捷が促したからである。一言以て蔽は、其の所謂黃禍は歐洲人民の利益を傷害するの災厄に非ずして、專制政治に對する禍害なるべしと云ふのである。專制政治に對する所謂黃禍は臆て思想を變形し制度を改更し、亞歐の兩土を一新する眞に有難き福音を有つて居るのである。

第二に露國は絶東に進出せんとして遂に日本の遮阻する所と爲り、又、印度境上にては日英同盟の爲めに何事をも爲す能はざることとなつてゐるから、其の外交政策は今後、どう云ふ風に成り行くだらうか、大いに研究すべきことである。最早昔から夢みて居つたパン斯拉ヴニズム即ち斯拉ヴ諸族の國を統一するの策に出づる外

鬱憤を晴す途はなからうと思はれる。是れは政治上の事であるから何時どうなるか分らぬとしたところで、露國は今後五百年か乃至其れよりも早く、帝國の破裂を來して、第二の佛蘭西革命を來しはしないかと思はれるのである。是れまでのナシヨナリストの運動より考へても、ツアーに對する國民の思想より推して見ても、ドウも箇様になりさうに思はれるのである。サウすると、茲に獨逸といふ國に就いて一つ考へなければならぬことがある。今は獨逸政府は國權擴張主義に熱中してゐて、而も露國の革命座視するに忍びざる關係があらうが、國內の社會黨が此の機に乗じて露國のナシヨナリストと相呼應したらドウするか。遠からずして、危きこと累卵の如しと云ふ形勢を呈出せぬとも限らぬと思はれる。此れ等の事に就きてはまだ／＼言ひたきこともあるけれども、政治の事は由來、變動極りなきものであるから、唯、想像だけに止めて置かう。尤も、余の考へては歐羅巴は來るべき五百年間には、英國を除くの外各國、皆、共和政治の國になつて仕舞ふだらうと思はれる理由

もある。既に羅甸民族は此の運動を開始してゐるのである。又、小さな國は何國かへ併合されて仕舞ふか又は何國かの鼻息を窺つて附庸のやうになるだらうと想像してゐるのであるが、是れも此處では想像に止めて置かう。何は兎もあれ、露國に於いて先づ思想界の大動搖が起つて延いて道德の危機を來し、是れが各國へも傳播すること猶、現時に於ける商業上の恐慌と同じやうだらうと思ふのは、強ち不當の言とは云へまいと信ずるのである。

四 宗教及道德思想の大變動

第三に茲は最も、世人の注意を促したいと思ふのは、從來歐亞の接觸衝突に由つて起りたると同様なる宗教及道德思想の變動である。前に掲げた五大時期の變動を見るに宗教及道德は段々、各部の人類を接近さして行く傾向がある。第一期に於ける佛敎然り。第二期に於ける基督教然り。第三期に於ける回教然り。第四期及第五

期に互りては物質的原因が大いに勢力を得て、交通運輸の便を開いたり、未開地の富源を開発したりして、大いに人類接近の範圍程度を増加して來たのみならず、また、宗教や道徳も其の影響を受けて、段々、人類を同一にしようとする傾向を有して來た。基督教が宇宙及人類に關して抱き來つた觀念も科學の進歩と人類生活の變動とに因つて殆ど革命とも稱すべき變動を受けて來たことが第一。又、亞細亞の宗教は、上流社會が科學の思想を養成したると、下層群民が基督教の熱心なる感化を受けたるとの二つで、大いに革新の必要に迫られて來た、是れが第二。又、科學其の物が古のやうに演繹的論法ばかりで、獨斷的假説を基礎とするやうなことが無くなつて、歸納的に事實の真相を研究するやうになつて來た處からして、舊思想を破壊して新に普遍なる人道の理想を建立せんとすることになつて來た。是れが第三である。斯の如く事實を取調べて考へて見ると、第二十世紀とは云はず、モウ第十九世紀から思想の變動は大分芽萌してゐるのであつて、日露戰役と云ふ空前の歐亞大衝突

が導火線となつて、其の勃發の兆候を現呈したのである。されば、日露戰役が世界の事情を一變する一大事件であると云つても、強ちに無稽の言とは云へまい。さて、今回の變動は従前の如く五百年かゝつて次の變遷期に移るかドウかと云ふと、是れは未來のことであつて、論じて見た所で、想像に過ぎないことになるが、人類接觸の範圍程度が従前に比すると大分大きくなつて來てゐるから、或は従前よりも早く變遷期に移るかも知れないと思ふのである。しかし、人類の變遷はサウ大した違ひのあるものではなからうと思ふ。

五 世の中の組織の變遷と道徳の危機

さて、斯う云ふ風に世の中が變遷して行くものと見ると、今日の第二十世紀は實に世界變動の一大時期であるので、舊時の思想は破壊されて、新時代の思想が建立される時代だと云つて不可はなからう。而して、世の中の組織が段々破壊されて來

ると道徳の危機が必ず起るのである。此の事も少しく論辯を費す必要がある。凡、世の中で道徳と唱へて居る所を見ると、其の時代々々で大分趣が異つてゐる。言を換へて言は、其の時代々々國の組織によつて、其の組織を維持するに必要な行為が良い行為となつてゐるのである。故に國によつても又、時代に由つても自ら變遷があるのである。時代や國ばかりではない、境遇場合に由つても同一でない事がある。例へば虚言を吐くと云ふことは悪いのであるが、死にともない親の臨終に際して、枕邊でまだく死にはしない、氣を確にしておいたまはれなどと云ふのは、子の人情であつて、虚言には相違ないが、悪いとは云へまい。それと同じやうで、理窟から云へば悪いやうなことも、國と時代とによつて、強ちに悪く見られないことがある。例へば、葡萄牙人が此の頃やつたことなどは、我が日本から見ると大逆無道此の上もないことのやうに思はれるが、これが國體の異つてゐる所である。封建時代に於いては、何は置きて、領主には絶対服従をしなければならぬと云ふことに

なつてゐたが、時勢が違つて今日となつては、さうは行くまい、上御一人下萬民と云ふことになつて來たのである。かく云ふと何んでもないやうなことがあるが、時勢の變遷で起つて來る道徳思想の變遷は實は大變動なので、是れが危機なのである。經濟上の危機も矢張り、同じことである。例へば我が邦の封建時代に幕府や各藩が美術工藝に特別の保護を與へて居つた爲に、種々精緻なる作品が出來て、工藝家も衣食の途に窮することがなくして、十分に作品に精神を注いでゐたのであるが、封建制度の瓦解と共に此の狀勢は急激なる變動を起して、工藝界は非常な恐慌に陥つたのである。一時は渾沌たる世界に成り行つたのである。之れと同じ様で、時勢の變遷と云ふものは恐ろしいもので、従前、確定して動かなかつた道徳の基礎も動搖し始めたのである。世の人が道徳地に墜ちたとか、彝倫地を掃つたとか云ふのも、此の變遷時期が多いのである。是れはドウ云ふことであるかと云ふと舊時の道徳が地を掃つたのであつて、まだ新時代に適應する道徳が建立せられないからである。其

れから、新道德が確立せられて、今度、又、時勢の變遷に由つて破壊が起ると、初新道德の效用を謳歌した人が又々道德地に墜ちたとか葬倫地を掃ふたとか云ふ様になるのである。此の舊道德の破壊時代が即、道德の危機である。

六 道德の危機と恬淡主義

道德の危機が起ると、茲に種々な現象が起る。一つは舊思想の道德に由れるもので、一つは新思想の衝突に由れるものである。舊思想の道德は又、二つの現象を生ずるのである。恬淡主義と頑迷思想とである。恬淡主義は一方から云ふと絶望主義であつて、従前、社會上の地位を占たものが、時勢の變遷に由つて、俄然、其の地位を失ふと、厭世の念益々、熾になつて、遂に世を避けて仙人のやうな生活を送らうと云ふことになる。古代に敗者の地位に立つた者が、身に墨染の衣を纏つて、浮世の塵を避くるやうになつた例は幾らもある。羅馬の奴隸制度が廢れて、社會の上下地

を代へると云ふ有様になつた時に、恬淡主義が盛に行はれたのも此の一例である。モウ一つは頑迷思想であるが、是れは世の有様に愛想が盡きて世を通れる者に比すると、氣慨の多い者であつて、新思想の過激なる者を抑制するには、至つて有要な道具である。其利不利の論は姑く置き、兎に角、新思想に衝突して、何事も古に復さんとする思想は、危機に際して必ず起るべき者である。斯く申す余なども、壯年の時、西洋の民主的思想が餘りに跋扈せるを慨して、守舊家と連絡して、時事を論じたることがあつた。しかし、余が憲法の實施は皇室を泰山の安に置き奉るものなりと云へる議論と、守舊家が西洋思想の憲法は國體を蔑如する者なりと云へる思想とは遂に相容れざるに至つたものである。其れはさて置き、此の守舊の思想は頑迷に陥るときは遂に自然に倒ふて仕舞ふのである。熊本神風連の思想の如きは最早今日では誰も賛成する者は無くなつて、唯、其の氣慨が永久に世人の賞讃を博してゐるだけである。

新思想はドウかと云ふと、是れも初期には破壊の一方のみに偏する者であつて、建設的の價値を有つてゐないのが随分多い。維新の當時、豪傑連が舊時の思想を破壊し去つて、道徳の頹敗を醸さんとしたのなどは、思ふべきことである。しかし、丁度、頑迷者流が一方に於いて極端なる破壊を阻止せんとする功用を有すると同じく、他の一方に於いて時勢の進運に適する建設的事業を起すに於いて亦、效用のあるものである。

七 頑迷破壊

道徳の危機には斯の如く極端と極端との衝突があるのがあるが、此の際、眞に國家の安泰と進歩を思ふ者は、必ず虚氣平心、眞の建設的事業を計畫せざるべからざることに信ず。兎角、世の中は危機に際すると人心が激昂して、眞正の中道を失ふことが多い。幕末の攘夷論の如きも一例である。夷狄來て神州の靈地を汚すと云つ

て見た所で時勢の推移はドウすることも出来ない。然し、當時の志士と云ふ者は之れが爲めに血湧き肉躍つたのである。其れかと云つて、維新以來日本の事は何事も舊弊だと云つて、羣のない樹木までも切り倒して仕舞ふなどと云ふのは是れも感服の出来ない話である。此の際に當つて眞に道徳の危機を救つて、秩序ある社會を作り出さうと云ふのは、ドウしても、頑迷でもイケねば、破壊でもイケぬのである。何故なれば、社會には一種の活力が動いてゐるので、之れに注意して行かないと云ふと、實行の出来ない頑迷、實行の出来ない破壊が出来るのである。

茲に至つて注意すべき點が三つある。一は社會の體制及時代精神、一は社會運動の種類、一は現制を維持し又は破壊せんとする要素である。

八 社會の體制と時代精神

社會の體制及時代精神は實に恐ろしい者である。社會の體制と云ふ者は歴史上、

最も尊重すべきものであつて、容易に破壊の出来ないものである。而して時代精神と云ふ者は中々恐ろしい者で、社會の體制と云ふ者も、時代精神に由つて變體を現はしつゝあるのである。陸行かば草むす屍、海行かば水づく屍、大君のへにこそ死なめ、安閑には死なじと唱へたる精神は、我が邦千古不滅の國體を表はす者であつて、西洋人が王室を以て一の大なる貴族に過ぎずとして居るのとは雲泥の差違がある。しかし、時代精神の趨向は何時までも同一の方法で此の體制を守らせないのである。皇室を泰山の安きに置き奉るは古も今も違はないとして、而して、今は憲法を以てして、上御一人下萬民の主義に由らなければ、此の主旨が徹底しないことになつた。維新以後、時代精神の趨向を酌量せられて、萬機公論に決するの國是を定められたるは、實に機宜に合ふた御處置と云はなければならぬ。

次に社會運動にも種々なる類がある。時代を左右し得べき運動と、さに非ずして單に一時の奇矯に過ぎざる者とがある。之れを心得ずして、單に一時的の運動に注

目して、主要なる運動に對する處置を忽諸に附するときは、本末輕重を顛倒して事を誤るの恐がある。古來からの歴史を見ると瑣末の枝葉にのみ汲々として、社會の病根を救治することが出来なかつた例は澤山あるのである。人間の身體に就いて云つて見ても、庸醫の仕方と熟練な醫者の仕方とは、病根の診斷に於いて、大變な差違がある。腸窒扶斯の診斷が付かなくつて、唯、熱が出ることにのみを氣を焦つて、アンチピリンやヘブリンばかり投じたつて、何の益にも立たない。國を治るも此の理に均しと云つて宜しからう。

九 投薬も癒機催進に限る

第三に社會に於ける種々なる要素がある。是れには社會の體制を維持せんとする者と、之れを破壊せんとする者とが必ずある。之を能く心得て置かぬと、誤ることが多い。破壊して宜しい者を破壊せんとする要素ならば、宜しく之れを放任して宜

しい。維持せざるべからざる者を維持せんとせる要素ならば、之れを破壊するの必要がないのみならず、之れを過度に奨励せぬでも、自ら秩序的に發達して行くのである。此の理は人間の身體に就いて見ても分る。人間が強健である間は、適度の運動をして、適度の滋養をさへ取つて行くなれば、強ちに強壯劑を用ふる必要はないからう。少し異状が起つても所謂 *Jus medicatrix naturae* 即ち自然療法で直に回復するのである。病氣が起ると薬を投ぜねばならぬが、しかし醫術と云ふ者は此の *medicatrix naturae* を助けるに過ぎない者であつて、所謂癒機催進に過ぎないのである。國の發達も同じ事である。無暗に心配して行くと、丁度健康の人が病人と同じ様な養生法をやつてトウ／＼本當の病人になつて仕舞ふのと同じ様な有様になつて來るのである。破壊の方も同じ事である。便秘して頭痛が甚だしくなつたら直ちにカール、スでも硫苦でも用ひて下して仕舞つて宜しい。出すべき者は出して仕舞つて建設的の治療を施すのが醫術の根本主義であらう。國の治め方も其れと同じである。

要するに、社會の改良とか刷新とか云つて居る者は社會の實際に通じて、其の真相を診斷して、根本療治をしなければならぬのである。而して、今の第二世紀は世界的道徳に危機を發生せる時代なりとせば、是れから之れに處して行くのには、世界的社會運動の事相に着目して行かぬと大變の間違ひが起らうと思ふのである。蝸牛角上の争ひは、最早昔日の夢とならねばならぬ。最早偏狹な考へては世の潮流に敵對が出来ないのである、世界の大勢に通じなければ國を治むることは出来ないのである。基督教徒が佛殿の建立を目撃して、口角泡を飛ばして嘲罵を逞しくしたり(露國)金もなく兵もなくして徒に燕趙悲歌の士となつたり(波斯)したつて最早駄目である。第二世紀は世界の道徳を一變して、新なる基礎の上に建立せんとする時期の序幕を開いて居るのである。此の間に處して、能く時務に通じ、歐亞の文明を融和し、以て、道徳の危機を救ふ者、誰れかある。之れを日露戰役以後五百年の時期に於いて見出したのである。

日本と歐羅巴の社會發達の歴史の比較

一 彼我商才の比較

近頃日本で斯う云ふ議論がある。我が日本は勇武を以て世界に鳴つて居る。戰では世界の各國が來ても引けは取らぬ。けれども商業と云ふ事に至ると、是れは逆も外國と肩を並ぶことは出来ない。斯う云ふ議論があるのである。何故にさう云ふ議論が出るかと云ふことを尋ねて見ると、其の答は甚漠然としたものである。一體日本人と云ふものは、尙武の人間で商業的人間ではない。故に戰では外國に勝つても商業では他國に負くる。斯う云ふことを言ふ。所が余は之れに非常な反対な説を有つて居るのである。歴史から段々考へて見ると、日本の人間も矢張、商業的人間であつて、歐羅巴の人間に決して負くべき人間でない。斯う云ふ説を抱いて

居る。今其事を御話するに就いては、日本の中古の商業、西洋の中古の商業、此の二者を比較して見ると、余の論點が餘ほど確かになる。そこで之れを述べたいのである。

二 日本民族と獨逸民族の姓氏と王室比較

ずつと昔に話は遡るけれども、太古の状況を少し話したい。歐羅巴の現今文明の先達とも申すべき人種、例へば、獨逸人、英吉利人、斯う云ふ人種の極く古い時代の有様を見ると、日本の太古の状態と餘ほど能く似て居る。御承知の通り現今の第二十世紀では、商工業で天下に雄飛しようとして云ふ所の人種は獨逸人種である。此の獨逸人種は太古はどうか。どう云ふ様な鹽梅に經濟的社會的其の他萬般の事柄を處置して居つたかと云ふに、獨逸民族はゲシユレヒトと云ふものが本體である。ゲシユレヒトと云ふのは日本の氏と同じやうなものである。些末な點を調べて見ると

大分違ふが、大體に於いては日本の氏と同じである。氏と言はんでも、カバネ、も少し詮じ詰めて部曲と言つて宜しい。それと似たものである。此の二十世紀に於いて商業上優勢を有つて居る所の獨逸民族の古の團體はゲシュレヒトが基であつて、又東洋に於いて之れから覇權を握らうと云ふ所の御互、是れも矢張、古はゲシュレヒトと同じやうなものが本體であつた。それから此の日本の、皇室と云ふものはどう云ふものである、皇室と云ふものも亦是のゲシュレヒト、氏の上に超越したる所の一の家族である。言ひ換へて見れば、日本種族の大本家、是れが日本の皇室である。そこで獨逸の歴史を見ると、フランク王國、此のフランク王國と云ふはどう云ふものであるか。是れは矢張り澤山のゲシュレヒトの中の一番頂上のもものが王室となつてゐる。斯う云ふやうな鹽梅にして天下を統御して來た。實に類似の點が多いと言はなければならぬと思ふ。

三 文明輸入の徑路比較

それから、此の日本の王朝と云ふもの、始めはさう云ふ組織で成り立つて來た所が、段々朝鮮や支那の文明と云ふものに感染して來た。朝鮮から文明が這入つて來て、それから終には段々と支那の文明が輸入せられて、法律から風俗に至るまで支那風になつたと云ふ譯である。之れを西洋に較べて見ると、獨逸民族、昔、野蠻と言はれて居つた所の獨逸民族が羅馬の文明に感染したのと同じことである。それから、日本は之れと同時に佛教の蔓延すると共に段々天下の形勢が變じて來た。而して此の社會の上流の人が率先して此の佛教を尊信すると云ふことになつた。其の極上古以來の質樸の風と云ふものが段々と失せた。之れと同時に又上古に於いては共同的性質を有つて居た此の日本の人間、共同で何でもやると云ふ、それが段々變じて、個人思想が這入つて來た。昔は御承知の通り、氏と云ふものがあり、部曲と云

ふものがあつて、皆共同で物事を遣つた。個人と云ふ思想は殆んどなかつた。處が佛教が這入つて來ると共に個人思想が這入つて來た。而して之れが爲に日本思想と云ふものは非常な變化を受けたのである。西洋はどうか。丁度メロギンジャン朝の時代に基督教が這つて來て、さうして丁度同じ結果を呈した。矢張り此の基督教と云ふものが個人的思想を鼓吹したのである。是れも亦能く似て居る。

四 王室の衰微比較

それからして、日本の王室と云ふものは段々衰微して來ると云ふ傾向を有つた。西洋のメロギン朝亦其の通り、段々薄弱になつた。昔の尙武の氣風は漸次衰頹した。非常に弱くなつた。其の弱くなつた所からして、どう云ふ結果を生じたか。是れは皆さん歴史で能く御存知のことである。即、獨逸民族の王室と云ふものは皆滅びてしまつて、ハウスマイヤ、又マヨールドモ是れは日本で申したならば攝政關

白とでも言ふべきもので、是れが來て、天下の權を握ることになつた。即 王朝に取つて代つた者はカールマルテル、ペピン。之れに次いでカール大王、是れ等が天下を取つたのである。此のペピンと云ふ男は小さな人であつた。一寸法師でもあるまいが、丈の高くなかつた人である。如何なる造化の戯れであるかは知らぬが、其の息子のカール大王と云ふのは人並優れた大きな男であつた。諸君の内には丈の低い人もあらうが、御子さんは大きい人が出來ぬとは限らぬ。此の點は御失望のないやうに願ひたい。兎に角、ペピンと云ふ小さな男にカール大王と云はれる大きな男が出た。是れ等の人々が天下の權を取つた。日本は少し違つた點があるけれども、矢張り、王室が衰微して、天下の權と云ふものは段々藤原氏に歸した。是れも同じことである。所が歐羅巴で此のペピン並にカール大王などと云ふ人の子孫は段々柔弱になつた。日本の藤原氏と云ふものも、其の始めは鎌足などと云ふ偉い人があつたが其の子孫になると段々柔弱になつた。能く芝居にもあるが、日本では男のくせに女

の眞似をして、齒を涅めて、ペタ／＼白粉を付けて、近頃の墮落したハイカラ書生のやうなもので、甚だ宜しくない。之れも歐羅巴と同じく皆柔弱に流れて來たのである。

五 僧侶の權力増大の比較

此の際に於て僧侶と云ふものが非常な權力を、歐羅巴でも、日本でも、有つて居つた。思想界の支配はもと僧侶がして居つたのである。此の僧侶が歐羅巴では大地主だ。即ち、歐羅巴の中古の僧侶といへるものは大抵大地主である。日本でも、僧侶の權力は非常なものであつた。そこで歐羅巴では此の僧侶が大地主であつて、非常に偉大なる權力を振ふ所よりして、國王並に政府の官吏と云ふものは非常に困難をした。僧侶の機嫌を少しでも取損ふと大變なことになる。所が之れは防ぐ事が出來ない。僧侶の權力を防遏することが出來ない。何となれば、一般の人民が皆此の僧

侶を信仰して、どん／＼金を喜捨をする。無暗に金を出す。僧侶は益々富む。俗人は益々貧。斯うなると、僧侶も輕蔑が出來ぬ。それで、政府の役人共が少し意に逆らふと、さう云ふ金持であるから、直ちに武器を以て向つて來る。實にえらい事になつた。日本が丁度其の通り、春日の神輿を動かしたと云ふことは歴史にも出て居ること、恐れ多くも、天子様でさへ、己の意の如くならざるものは雙六の采に、加茂川の水に、山法師だと仰せられた。加茂川の水を逆さに流さうと思つても、さうはいかない。雙六の采をボンと振ると、思うた通りには出ない。僧侶も矢張り其の通りである。僧侶と云ふ大勢力は中古に於て東西其の揆を一にして居る。今ではさほどではない。昔は偉いものであつた。そこで、さう云ふ類似の點があると云ふことを申上げて置かなければならぬ。

六 封建の比較

それから、此のフランク王國が歐羅巴で段々衰へて來ると、遂に封建政治になつた。

日本でも王朝の衰微と共に封建政治になつた。同じやうなことがある。段々地方に居る貴族共が獨立して來ることも同じである。日本の地方豪族、歐羅巴のローカル・ロード是れは同じである。さう云ふ有様であつた。それから、歐羅巴には封建が盛んなる時代に十字軍と云ふものが起つた。此の十字軍が起つたと云ふことは色々な原因がある。けれども、兎に角其の結果と云ふものは亞細亞大陸の文明を輸入した。戰闘の上に於ては其の目的を達しなかつたが、非常に物質的の利益を得た。さうすると、日本でも亦同じやうな事をやつて居る。それは豊臣太閤秀吉と云ふ人があつた。何でも猿のやうな顔をして居つた人であると言ふことだ。私は遇つたことがないから知らぬが、其の豊臣太閤秀吉が大軍を催して朝鮮を攻めた。其の戰争の目的は何だと云ふと、先づ朝鮮を取つて、それから支那を滅ぼして、天竺國ま

て行く積りであつた。それは、今に斷片ではあるけれども、記録が残つて居る。天竺に行つて閻魔大王をして年々日本に貢を納めさせる。其の使節は牛頭馬頭の鬼をして之れを勤めしむる。牛頭馬頭が特派全權大使だ。何にしても斯う云ふことが太閤の窮極の目的であつた。是れは歐羅巴の十字軍がジェルサレムを陥れて基督の聖地を我が手に入れ、其の邊を皆己のものにしてしまはうとしたのが、窮極の目的であつたのとよく似て居る。而して戰闘は何れも目的を達しなかつた。歐羅巴人は土耳格の爲に遮られて、深く亞細亞に侵入することは出来なかつた。太閤秀吉も亦種々なる事情よりして支那まで入込むことが出来なかつたのである。けれども、何れも物質的の文化を齎して來た。即ち大陸に接觸したる所よりして非常な利益を得た。是れなどは亦東亞其の揆を一にして居ると言はなければならぬ。

七 中央集權の比較

それから此の封建が段々を打ち壊れて來ると、今度は中央集權と云ふものが起つた。是れも亦、日本と西洋と同じである。徳川氏時代、一體徳川氏三百年の時代を封建時代と云ふのであるけれども、これは純粹の封建ではない。今日の政治學の學理上から言ふと、矢張り中央集權と云ふ方に入れなければならぬ。封建と言ふと群雄が割據して殆ど獨立になつて居るやうな時代が之れが封建である。徳川時代に、御承知の通り、家康、秀忠時分は封建の餘勢が其の儘存續して居るけれども、もう三代家光の時になると、天下は悉く徳川氏の配下に歸すると云ふ状態になつた。又さう云ふことを仕遂げようが爲に種々なる政策を運らしたのである。或は手に合ひさうもない大名になると、自分の娘を嫁にやる。娘のない時は家門又は家來の娘を養女にしてやるなどと云ふ様な種々な政略を運らして遂に中央集權となつた。丁度それが歐羅巴の時勢を見ると同じことで、彼の英吉利のチュードル王家が封建を打壊した。さうして、其の王權と云ふものが段々と増加して來た。斯う云

ふことになつて居る。それから佛蘭西リシエリユー大宰相、其れからルイ第十四世、遂に中央集權を行つた。少し後れて居るが、獨逸でホーヘンツォルレン家が獨逸を一統したと同じやうである。所が其の歐羅巴で此の封建政治が打壊れてしまふと、大分困る人間が澤山起つて來た。昔の通りに勢力を有つて居ることの出來ない人間が澤山起つて來た。例へば英吉利でゼントリー、獨逸のユンケル、斯う云ふやうな先生達が大分困却を極めて來た所からして、社會と云ふものは反動を起さなければならぬ有様になつたのである。

八 社會革命の比較

そこで一七八九年、日本の寛政二年に佛蘭西に大革命が生じた。それから佛蘭西大革命ほどではないけれども、英吉利にも大革命が行はれて居る。それから獨逸で一八四八年の革命、それから丁度日本の一八六八年即ち明治元年戊辰の改革、實に能

く似て居る。一體御維新の改革と云ふものは王政復古と云ふのである。勿論王政復古には相違ないけれども、是れは學問上の意味から言ふと、矢張り、社會的改革である。全く今迄の社會を破壊した。佛蘭西大革命は、一六八八年の英吉利のグローリヤス・レヴナリユション、皆同じやうなるものである。どうしても、社會がそこ迄行つて破裂しなければならぬ。經濟上からして原因を尋ねて見ますと、さう云ふ結果を現はさなければならぬと云ふことになつて居る。其れは東西能く似て居るのである。

九 日本と歐羅巴との唯一の相違

斯う云ふ風に歐羅巴と日本と其の歴史を比べて見ますと丸で同じであります。同じであるが、只茲に一つ違つて居るのは日本の皇室であります。前にお話しました通り、向うではペピン、カール、それが天下の政を執つたが、それと同時に王様を廢してしまつた。日本は王朝と云ふものは名のみであつたけれども、ちやんと残つて居つた。遂に今日に至つて皇威世界に赫々たる有様になつて居るのは實に御互に御同慶至極である。之れ丈けは違ふ。其外の事は社會の趨勢と云ふ上から見ますと少しも違はない。少くとも違つて居ない所から見ますと、歐羅巴人のやつた仕事に日本人に出来ないことのある譯はないので、どうしてもさう云ふ斷言が下される。

十 西洋は先進日本は後進

成程西洋は先進國で、日本より先きへ進んで居る。少し年代が早い。早いかから先進國、即ち兄貴だ、兄貴であるけれども、弟必ずしも兄に及ぶことが出来ないこと云ふ理窟はない。若し子供と云ふものは親父に及ぶことは出来ない、弟は兄に及ぶことは出来ないこと云ふことであるならば、國は段々衰ふるの外はないのである。親

父よりも子供に偉いもの又孫に偉いものがあると云ふことでなければ國は盛んにならぬ。それであるからして、どうしても日本と云ふものは先進國だと言つて彼に競争が出来ぬ筈はない。況んや歴史を繙いて見ると、前にも御話したやうに、實に符節を合するが如き變遷を経て居るのである。

そこで斯くの如く東西共に符節を合したる如き形跡があるのであるけれども此の間の時代が少し違つて居る。西洋の方が一歩づつ先きになつて居る。何故に之れが一歩づつ先きになつたのであるかと云ふと之れには自ら原因がある。決して偶然ではない。日本人が西洋人に劣つて居るからと云ふ譯ではない。自ら歴史上の理窟があるのである。即ち、御承知の通り日本では寛永年中に鎖國の令を布いた。此の鎖國の令を布いた所よりして、外國との交通は其の跡を絶ち、僅に和蘭支那の貿易があつたばかりである。以て徳川氏三百年の歴史をなした。丁度之れだけは後れて居る。さうなければ決して後れはせぬ。そこで此の中古の時代に遡つて彼我を

比較研究して見ると、日本人必ずしも西洋人に劣らぬ。西洋人必ずしも日本人に優らないと同じやうな、同一の變遷を殆ど同時に經來つて居ると云ふことは事實に明かに見える。そこで本邦中古商業の比較研究をして見ると云ふことは大に趣味ある所の問題となる。

一一 中古の日本商業は西洋に勝る

世間の人は皆斯う思つて居る。日本の中古など、云ふものは實に野蠻で、逆も西洋のやうな状態には進んで居なかつたらうと、斯う想像するのが常である。所が焉ぞ知らん、歴史を繙いて見ると丸で事實は反對である。或る點に於いては日本の方が勝つて居ると云ふ點もある位である。今此の事實を二三擧げて、最後に結論として、一體此の進歩すべき所の國民には一定の原則のやうなものがあつて進歩するものであると云ふことを申上げるやうにしたいと思ふ。

一一一 外國交通と海賊

先づ之れから中古の商業に就いて彼我の事實の比較を致します。第一には外國交通の御話してある。外國交通と云ふものは日本でも支那でも海賊に因つて媒介されて居ることが多い。即海の泥坊であります。是れは歴史上體面が甚だ宜しくない。西洋ではコロンブスと云ふ人があつた。此のコロンブスと云ふ人は一四九二年に亞米利加を發見したと云ふ。亞米利加を發見したといつても、西印度の島であります。其の事を一寸述べて置きますが、一體コロンブスと云ふ人が亞米利加に行きましたのは、どう云ふ譯で行つたかと云ふと、是れは抑も日本に來ようと思つたのである。日本に來ようと思つたのが目的であつた。それなら日本を知つて居たかと云ふに詳しくは知らぬけれども、臆氣に知つて居つた。と云ふのは伊太利人のマルコ・ポーロと云ふ男があつて、此の先生が東洋へ來て、歸てから書物を書いたが、其内に

ジバングーと云ふ所がある。是れはマルコ・ポーロが自ら見たのではない。支那の傳説や何かで想像を描いて書いたものである。それに金の柱に銀の屋根、玄關先には眞珠の砂が布いてあると云つた様なことが書いてある。えらい宜い所だ、是れは日本のことである。コロンブスと云ふ先生も人間並に慾があつた。否、人間以上に慾があつた。どうしてもジバングーへ行かうと考へた。それには印度の方から行かないで、地球は圓いから西の方から行かうと考へた。それがゆくりなくも西印度群島の或る一島へ着いた。そこでコロンブスが上陸して第一に搜したのが金である。所がマルコ・ポーロの言つたのは大分様子が違ふ。けれども段々搜して見ると偶然にも一寸金を見出した。之れは金があるに相違ない。愈々以て是れはジバングーだと言つて大いに喜んだと云ふ話がある。此のコロンブスと云ふ人は一體如何なる人であつたか。如何なることとて以て航海術を學んだかと云ふに、コロンブスの傳記を讀んで見ると、抑も其の始めは海賊である。コロンブスは海賊である。亞米利加合衆

國は海賊に依つて發見せられたる所の國である。尤も亞米利加へ行つた時には海賊は止めて行つた。海賊になるには何か必要があつて海賊になる。即ち食へぬから海賊になる。えらい人が海賊であつた。それから又歐羅巴で海賊と云ふものは地中海などを始終横行して居つたもので、其の地中海を航行する船舶と云ふものは随分海賊の爲めに困難に陥つた。是れは歴史に澤山見えて居る。是れは當り前の海賊である。其の海賊の中にも殆んで政府的の組織をなして居た海賊が澤山ある。上に將軍があり、其下に大臣のやうなものが居る。斯う云ふものがあつた。組織的に海賊をやつて居つた。そればかりでない。西班牙と云ふ國が其時に亞米利加と貿易を開いて金や銀を澤山積んで歸り、其の時に英吉利の海賊が來て、それを奪ふ。其の海賊と云ふものがどう云ふものであるかと云ふと、國王が尻押しになつて居る。英吉利のネリサベス女王は海賊と非常に親しかつた。海賊に勳記を與へたり何かした。是れは組織的の海賊、大規模の海賊である。彼の支那海あたりに出沒して支那の無頼

漢がやつて居るやうな海賊ではない。皆立派な武器を有つて居る。だから其當時總ての船は武装をしなければ逆も歩けなかつた。武装をするばかりではない。即ち船舶が聯合して行かなければ逆も大西洋を横切ることが出来なかつたと云ふ有様である。此の位海賊が盛んで而も其の海賊が組織的であつたと云ふが、日本でもさうだ。日本の海賊と云ふものは實にえらい。ずつと始めのことを言ふと藤原純友と云ふ先生などが居りました。是も海賊である。それから後には海賊も中々大きなものになつた。支那へ行きますると倭寇と云ふ。是れは取も直さず海賊である。尤も是れは普通の時にはやらない。好い鹽梅に貿易が出来ると海賊にはならぬ。やり損ふと海賊になる。時には立派な船で立派な組織的の海賊をやる。時に依ると暴虐を擅にする海賊となる。而して日本には御承知の通り海賊大將軍と云ふ名前が澤山見えて居る。海賊大將軍と云ふのは何であるかと云ふと海賊の首領である。丁度地中海や大西洋で以てからに組織的の海賊が横行したのと同じである。所が成程日本には

海賊も澤山あつたらうけれども、英吉利のやうに國王が尻押しをしては居るまいと仰せられるかも知らぬが、それは大いにある。一寸年代を茲に書いて來ませんから忘れましたが。大内義興が海賊を催して朝鮮を征すと云ふことが立派に本文にある。大内義興が海賊の尻押しをした。大内義興は周防の國の太守である。是れが海賊の尻押しをした。海賊を催して朝鮮を征す。さうなつて來ると是れは日本も西洋も同じである。而も之れは餘り年代が違ひませぬ。丁度此大内義興の時が足利時代、それから葡萄牙人などが段々と海上の大發見を致したのが矢張り足利時代、日本へ始めて葡萄牙人の來たのは即ち天文十一年、たと年代は違ひませぬ。それから惜しいことには此日本では足利將軍と云ふものが歐羅巴の葡萄牙や西班牙の王様と違つて政策を少し誤まつて居る。誤まつて居るが爲に歐羅巴の如き大事業が出来なかつたと言はなければならぬ。御承知の通り葡萄牙はヘンリー航海王、西班牙にはフィリッポなどといふ偉い天子が居つて、之れが尻押しをしてどんくやつた。盛んに海上

貿易を奨勵した。詰り言を換へて見ると、西班牙なり葡萄牙なりと云ふものは海外に向つて自動的の働きをなした。所が日本で足利と云ふものはどうであつたかと云ふと、是れは受身である。受動的である。それが爲に大にいけなかつた。倭寇と云ふものが出ると、足利では之を妨ぐると云ふ方針を執つた。西洋では却つて斯う云ふものを奨勵した。之れ丈が少し違ふ。違ふが、此の時に一つ兩方とも同じ事があつた。

一三 海外貿易の目的の比較

足利であつても、西洋であつても、貿易の大目的とする所に一つ同じことがある。西洋でシニユス・オヴ・ウォーアまたセレブラム、ベリーと云ふ言葉がある。之れは戦の首脳と云ふことである。戦の首脳とは何であるかと云ふと、金である。それで、西洋では其の時分と云ふものは外國と交通をして海外貿易を開くと云ふの

は金を取らう。金を取りさへすれば宜しいと云ふのだ。金は何であるかと云ふと金銀である。それであるから此の西班牙あたりの人が亞米利加に始めて行つて土人を虐待したことは夥しい。虐待して何をしたかと云ふと、金銀を取る。金銀是れ命、金や銀は食ふことは出来ないが、何でも金銀だ。日本で足利と云ふものが貿易をしましたがのほどうか。支那貿易などをやつたのはどうか。其の時に日本では銅銭が非常に不足した。其の時分も日本の金は銅であつたが、其の銅銭が當時非常に不足した。そこで、支那に對して貿易をした足利の政策の根本目的と云ふものは銅銭を得ようとするのである。だから銅銭を得る爲には足利氏は如何なる屈辱をも忍んだのである。又大内義興も矢張りさうである。御承知の通り足利は進貢と云ふ一つ御土産を持つて行く、其外もう一つ商品を搭載して行く、それを附搭品と云つて居る。さうすると支那と云ふ國が又妙な國で、何でも威張つて居れば宜しい。損をしても威張りさへすれば宜しいと云ふ國であつた。それであるから日本から進貢して來

る。種々な物を進貢して來るから威張つて取る。意氣揚々として、それを受納する。其の代り之れに就いて商品を持つて來て居る。斯くの如く謙遜してやつて來る者には金を呉れて、其れをどん／＼買つてやる。損をしても構はぬ。是れが支那の國體であつたのである。

さう云ふ譯であるから甘んじて買つた。そこで、足利は此の方法で以て銅銭を澤山に得る。そこで銅銭を得ると足利の財政と云ふものは助かるのみならず、其の外諸大名など、云ふものも餘程需ふ。それで諸大名も足利の送つた船などに加はつて色々やつたのである。皆目的とする所は銅銭。歐羅巴はセレブラム、ベリー、少つとも違はないのである。

一四 重商主義の比較

それで此の時分に主義として居た所のものは今申す通り始終金である。之れが歐

羅巴に於いて遂に重商主義と云ふもの、根本となつた。日本では重商主義と云ふ名前は無いけれども、矢張、貿易上の鎖國的政策と云ふものを成就することになつた。貿易と云ふものに對して日本の金を出さない。是れは即ち、貿易上の鎖國政策である。西洋の重商主義と變らない。斯う云ふことは歐羅巴でも起り、日本でも亦起つた。是れは餘程面白い所である。

一五 貿易政策の比較

そこで、今御話しました通り同じやうな轍を履んで居るが、政策と云ふものは少し變つて居つたのである。即ち商業に於いては自動的受働的と云ふ差を生じた。日本の如きは受身的であつた、此の受身になつたと云ふことは非常に屈辱であるかの如く見ゆるのであるが、たと時代の違いはない。英吉利の狀態と云ふものを見ると矢張英吉利と云ふ國も受身的の貿易と云ふものを多年の間やつて居つたのである。御

承知の通り獨逸の北部にハンザ聯合と稱するものがあつた。是れは只今では微々たるものであるが、昔は大變な聯合であつた。非常な勢力があつた。此のハンザと云ふ奴が非常な商業上の勢力を有つて居つて、英吉利にも入込んで居つた。此ハンザが英吉利に入り込んで居留して居つた所をスタールホッフヌスチャールドと稱して居る。今に其廢れ跡が残つて居る。此の所に居留して居つて英吉利と云ふ國の貿易と云ふものは絶えずハンザがやつた。英吉利は丸で受身であつた。そこで英吉利の國ではマーチャントアドヴエンチュアラー、商人冒險者、之れには色々歴史があるけれども、十三世紀中にブラバント公が組織したる一隊である。外國で乗り込んで行つてやらう。今迄は受身的の貿易をして居るが、是れからは外國へ乗出して行つてやらうと云ふので、此の商人冒險者の一隊を組織した。是れが方々へ乗出してやつたが、丁度其の英吉利の方法は日本の海賊と同じである。斯う云ふやうに、此の外國交通に付いては中古に於いて彼我共に同じやうなことをやつて居ると云ふこと

を申上げて置く。

今迄海外貿易のことに就いて海賊の御話をしましたが、尙ほ二三此の貿易のことに就いて申上げたいことがある。御承知の通り日本の海外貿易と云ふものは始めは支那朝鮮が目的である。所が足利時代、天文の十年に葡萄牙人が始めて種ヶ島へやつて来て以来、段々と西班牙、葡萄牙の人々が來朝することになつた。それから基督敎が擴がり又段々貿易が盛んになつて來たと云ふことも歴史に見えて居る。所が此の外國の貿易と云ふものに就いては、殊に九州が重でありすが、各大名が熱心に之れに従事した。此の熱心に貿易に従事したと云ふことが、是れが矢張、足利時代と同じ動機に出て居る。即ち前に申しましたセレブラムベリー、シニユウス、オヴ、ウオーア、戦争の腦、即ち金が欲しいと云ふのである。何て此の時分の諸大名が金が欲しいと言つたかと云ふに、それには自ら原因がある。御承知の通り此の日本と云ふ國は昔から農を以て立つて居る。それから武事に従事する武士大名、此れ

らのものは皆知行、後に申す知行であるが、領地と云ふものを皆有つて居る。此の領地と云ふものが即ち富、之れを西洋の言葉で申すならばランデント、インテレスト、斯う云ふものであるけれども、日本國の農業をなすべき土地と云ふものは僅かなものである。さう幾萬人の武士と云ふものを僅少なる土地を以て養ふことは出來ない。是に於いて土地を與ふると云ふことが餘程困難になつた所から、扶持米と云ふものが出來た。米を以て與ふる。斯う云ふことになつた。所が此の扶持米と云ふものも段々少くなつて來た。どうも幾萬の武士が増加して參る所から、扶持米でもいかに。兎に角此の大名と云ふものが己れの領土の保全を計り、己れの勢力の發展を計ると云ふ上からして、金が必要である。丁度歐羅巴の封建時代の諸侯が金が欲しい。金が欲しい。起きても寝ても金のことはかり考へて、戦争をやるのは金を取るのが目的であつたと同じことで、日本も亦此の趨勢に背いて居ない。そこで何でも金だ。金を儲けようが爲に皆之れをした。同じ精神である。只西洋の物が珍ら

しいから之れを買つたと云ふばかりではない。實に武器の精良なるものは大金を出して買つた。之れは國土保全の爲にやつたのである。國土保全に就いて第一必要なるは武器である。其次が金だ。斯う云ふことになつた。金が動機となつたと云ふことは明かなる事實である。それが先づ外國貿易に就いて一つ御話したいことである。それからもう二つある。

一六 勝手貿易を許さざるの比較

日本の外國貿易と云ふものは後世の所謂勝手貿易と云ふものではない。勝手貿易と云ふのは後世の辭であるが、此の勝手貿易と云ふのはどう云ふ事であるかと云ふと、人民が皆自由の權を以て貿易をする。今ならば御承知の通り誰れでも彼れでも貿易をしようと思つたら、之れに従事することが出来る。是れが勝手貿易である。之れに對して西洋ではフリー、トレード即ち自由貿易と云ふ字がある。能く翻譯な

どに勝手貿易と譯すべき所を自由貿易と譯した本がある。是れは本を讀む時分に十分御注意を願ひたいのである。昔の日本の貿易はフリー、トレードだ。併し人民が勝手に出来る勝手貿易とは意味が違ふ。其時分の貿易は勝手貿易でない。皆大名が自ら貿易をした。或は人民にさせた所が矢張りそれに干渉して行く。中々人民の勝手自由には出来ない。尤も現今と雖も貿易は悉く純然たる勝手貿易ではないが、昔は人民がしない。大名と云ふものが自ら貿易をするると云ふのが根本原則であつたのである。それだから、今日の言葉を以て言はば、官營貿易と云つても宜しいだらうと思ふ。それから降つて徳川時代に至つても矢張りさうである。和蘭と云ふ國と貿易をしたと云ふのも皆それである。長崎に會所と云ふものがあつて、此の會所が貿易に就いての一切の指圖をした。さうして、和蘭人が荷物を持つて参りますと長崎の港外に於いて官吏が嚴重なる検査をする。それから陸揚すべきものは陸揚をさせる。それから會所で相場を付けて賣買を行ふ。斯う云ふことになつて居る。であるから

皆官營である。歐羅巴の中古の貿易と云ふものを見ると、矢張さうである。勝手貿易ではない。餘程近世まであつたが、東印度商會と云ふものがある。是れなどは著しい例である。此の東印度商會と云ふは英吉利政府より特權を得て、さうして支那と東洋方面に於ける貿易の特權を得て居る。是れなどは一種の官營である。半官營である。況んやそれより以前の中古の歴史を見ると、英吉利は勿論佛蘭西、獨逸何れの國でも皆官營である。一として勝手貿易と云ふものはないと言つて宜しい。偶々勝手貿易に類したことがあつても役人が必ず立會ふ。市場と云ふものには必ず役人が立會ふ。日本橋の魚市場或は大坂天満の青物市、あゝ云ふ所へ今日は巡查は這入つて居るけれども、是れは取締の爲に這入つて居るので、相場を立てる品物其に關係する譯ではない。昔の市場と云ふものには定つた所の官吏が出て其の賣買のことに立會ふ。それには種々理窟があるが、其理窟を御話すると餘り長くなるから、それは止めて置いて、唯さう云ふ事實があつたと云ふことを申上げて置く。之れも

歐羅巴と日本と少つとも違はない。

一七 外國貿易商を虐待したる比較

それから其の次には斯う云ふ議論があるか知らぬ。例へば和蘭と云ふものに就いて見れば、日本は外國人と云ふものを餘程虐待して居る、長崎の港の脇の出島と云ふ所に和蘭屋敷と云ふものを拵へて、其出島の小天地に和蘭商人は居留して居なければならなかつた。事實上の牢獄であつた。是れは随分虐待である。歐羅巴にはそんな事はなかつたらうと思召す御方があるか知らぬが、決してさうでない。中古の歐羅巴の外國貿易を見ると出島の和蘭屋敷と同じものがある。少つとも違はない。例へばずつと中古の昔の事であるが、獨逸の商人が伊太利と貿易をする。どう云ふ事をしたか、遙々とアルプス山脈を越えて、其時分には鐵道も何にもない、遙々とアルプス山脈を越えて、ヴェニスに行きますと、此處に伊太利語で *Fondaco dei tedeschi*

と云ふものがある。是れは商館である。此れへ獨逸人は泊らんければならぬ。此の所へ来て商賣をする。此の商館より一步も外へ出ることは出来ない。長崎の出島と同じことである。また日本の出島では和蘭人に散歩を許した。其散歩を許した丈にはまだしも寛やかであつたと言つて宜しいのである。それから前に御話した獨逸ハンザの商人が英吉利へ行つて外國貿易の權利を握つて居つたのであるが、それも亦種々なる困難に遭遇した。色々な面倒があつた。斯う云ふことである。こゝらを以て見ると外國貿易と云ふものも矢張り西洋と同じことだ。

第二には内地商業のことに就いて御話をしたい、内地商業と云ふものは、どう云ふものであるかと云ふと、先づ都府と云ふものが此の問題の主腦となる。何となれば、此の中古の商業と云ふものは都府でやつたものである。田舎に行くと商賣と云ふものがあつたにした所が、實に微々たるもので、殆んど無いと言つて宜しい位である。誠に僅少な物々交換である。

一八 内地商業の比較

苟も商業と云ふ名稱を付し得べき所のものは是れは都府に在つたのだ。それだから、内地商業のことを御話をするには、都府のことを御話しなければならぬ。そこで全體歐羅巴の都府と云ふものが發達しました所の状態を見ると、二つの原因がある。第一は便利、第二は保護、此の二つの要素があつて都府と云ふものは成立つた。便利と云ふのはどう云ふ事かと云ふと、是れは其の商賣をするに一番便利である。例へば海岸である或は川に沿うて居る或は道路の四通八達の要衝にある、斯う云ふやうな所が即ち便利である。それから第二の保護と言ひますと、昔の商賣と云ふものは有力なる保護を受けないと完全に事業を經營することは出来なかつたのである。何となれば今日の如く警察が完全と云ふ譯ではない。今日でも絶對的完全とは言へないが、昔よりは完全である。中古は中々今日のやうな譯にはいかぬ。動も

すると隣國から財寶を掠められることが屢々ある。海で商賣をしようと思ふと前に御話した如く海賊が居る。陸に行くとも陸賊が居る。陸賊と云ふ言葉はないが、海賊と云ふ字がある以上は陸賊と云ふ言葉を拵へても差支ないと思ふ。私は此の間或る縣に行つて村格と云ふことを言つて大層笑はれた。人格と云ふ字がある以上は村格と言つても差支ない、ロヂツクがさうなる。そこで陸賊が陸續と現はれる。日本の芝居でよく見ることだが、宇都の谷峠だとか薩埵峠だとかで、庚申堂の中から鬚むしやな男が出て来て、旅人を脅迫して、金を出さなければ命を取るぞと云つたやうなことが澤山行はれた。除程險呑だ。それであるから、どうしても有力なる保護が要る。保護が要るに就いては如何なる所で保護を求めたら宜しからうか。どうしても、大名の居住して居る所の城下、是れが一番保護を受くるに宜しいのである。大名に色々な利益を興へて、其の代り保護をして呉れと言ふ。大名は武力を有つて居るから、之れを保護するに最も有力なるものであつた。それであるから、此の大

名の城下と云ふものに、ずつと商人が集まつて、都府が発達する。是れは自然の勢である。

一九 都府と商業の發達比較

それともう一つは御寺である。御寺といつても小さな寺ではいけぬ。大きな御寺。例へば延暦寺とか何とか云ふやうな色々な大きな御寺がある。さう云ふ御寺へ行くと御承知の通り中古は僧侶が非常な勢力があつた。まかり違へば春日の神輿を擔ぎ出して宮中まで迫らうと云ふ僧侶である。此の偉い僧侶の居る寺下、寺下と云ふ言葉はないが、城下と云ふ辭がある以上は寺下といつても宜しからう。其の寺下に商人が集まると云ふことになる。さうすると城下と寺下は保護が一番宜しい。此の所に都府が発達する。是れは歐羅巴の例である。所が日本の都府と云ふものを見るに矢張り向ふと同じことで、少つとも違はないのである。大名の城下に都府と云ふ

ものが發達する。ずつと昔は此の都府と稱すべきものは實は京都より外にはなかつた。所が武士の勢力が段々發達して參つて鎌倉が出来た。鎌倉が出来ると鎌倉は即ち都府の形をなす。それから足利時代に至ると諸方に都府と云ふものが出来た。有力なる諸侯が諸方に散在したものであるからして、實に立派な都府が諸方に出来た。それで日本の都府の歴史を調べて見ると、大抵大名か何かの城下である。徳川時代に大名の城下でなくても、其以前偉い人が居つたと云ふ所に相違ない。京都は禁裏の御膝元、東京は即ち徳川將軍の御膝元、名古屋は徳川大納言の城下、金澤は前田參議加賀宰相百萬石の城下と云ふやうな譯で、斯う云ふ所に發達した。さうして見ると、商業の主腦たる所の都府の發達と云ふものは日本も西洋も違はないのである。

二〇 經濟狀態の發達變遷

都府の事業に就いて御話しをすると、都府の職業と云ふものは、商工業が其の重

なるものである。今其の事を御話するに、順序として、先づ其の經濟狀態の發達を極く簡単に御話せぬと分らぬ。經濟學者は此の經濟發達と云ふもの、一番最初の時期を自給經濟と言つて居る。是れはどう云ふ事かと云ふと、自分に要る物は自分で拵へると云ふことである。或は書物に據ると自足經濟と言つて居るものもある。是れはどつちでも宜しい。是れは自分で要るものは自分で拵へると云ふのであるから、商賣も何にもない。詰り自分で食ふ丈けのものを自分の田地で造つて、それを自分が消費する。是れが經濟發達の第一期である。それが段々發達して來ると、今度は都府經濟の狀態となる。都府經濟とは一名商業經濟とも云ふ。前申したやうなのが自給經濟であるけれども、段々物が餘つて來る、餘つて來ると之れを交換する。商賣をする。そこで商賣と云ふものが具體的に發達をして參る。是れが都府の發達と期を同じうして居るのであるからして、都府經濟とも又商業經濟とも申すのである。それで此の都府經濟と云ふものになると、茲に工業商業と云ふものが非常

に發達する、斯う云ふ順序である。それでありますから、唯今御話をした都府と云ふものゝ發達は商工業の發達を意味して居るものであると御承知を願ひたい。是れは歐羅巴でもさうである。歐羅巴もさうであるが、日本でも矢張り其の通りである。即ち日本でも中古以來町が發達したが、先づ一番に指を屈すべきは堺である。商業が盛んで、外國との交通も頻繁であり、堺が一番に發達した。そこで歐羅巴の商工業の發達の状態を見ますと、昔の自給經濟と云ふ時代に於いては工業の専門家が起る、其の工業の専門家が商賣をする。工商兼務である。自分で拵へた所の品物を見世で並べて賣る。斯う云ふ譯になるから、工と商とを兼ねる。それで一番始めに其の工業が發達して居るのが大名の城下即ち武將の城下と云ふもので、而も武器の製造が一番早く開けた。何となれば、此の武器と云ふものは一番必要である。日本等でも能く調べて見ると、無論外のものも發達しては居るけれども、著しく

武器が發達した。西洋も同じことである。

それから、此の商工業が發達して参りますと、大名も商工業者も互に利益を得ることになる、商工業が段々發達して来ると、此の商工業者と云ふものは段々金持になる。金持になつて来ると、大名と云ふものは前に言つたセレブラム、ベリーの一件で、金が太分取れる。税が澤山取れる。誠に是れは便利である。所で商工業者の方も危険なる世の中であるから、大名に特別の利益を興へて其の保護を受けると云ふ必要がある。兩方利益である。大名も利益、商工業者も亦利益を得るのである。

此の事は日本でも同じこと、商工業に非常な利益を興へた。そこで段々其の金が殖えて来ると、益々此の状態が明白になる。日本で見ると、足利時代に就いて云つても、段々支那との貿易で金が比較的多くなつた。段々都府發達と云ふものは著しくなつて来た。所謂錢貨經濟と云ふものが段々發達するに至つた。御承知の通り經濟學者は交換状態によつて經濟發達の時期を三つに分けて

居る。第一期が物々交換時代、第二期が錢貨經濟時代、第三期が信用經濟時代、斯う分けて居る。其の第二期即ち錢貨經濟時代が丁度今云つた時代に當る。日本でも其の通り足利時代に於ては大分發達をしたのである。

二二 中古に於ける日本の市制

次に都府のことに就いてもう一つ御話を致したいのは市制である。市制と云ふのは即ち市の制度、都府の制度である。それに伴ふ事業を搔摘んで御話をすると、歐羅巴で中古發達したる所の都府に於ては、各此制度が餘ほど能く具備して居る。大分整つて居る。又此の都府と云ふものは歐羅巴でも特別な政治を行ふと云ふことになつて居つた。日本では此の市制とも稱すべきものが始めて起つたのは鎌倉時代である。實は日本では昔から京都以外に都府と稱すべきものがなかつたのであるが、鎌倉幕府が開けると、京都以外に於て都府と稱すべきものが發達して來た。それだ

から此の鎌倉が市制と云ふものを早く布いて居る。市制と云ふものを鎌倉で布いたが、之れを歐羅巴と比較して見ると矢張り其轍を同じうして居る。是れは少し政治の議論に涉るが、行政と司法とを分割することは昔から歐羅巴にあつた。即ち政治と裁判である。此の政治と司法はどうしても二つに分たなければならぬ。是れは法理である。併し日本は中々そんな法理などは知らなかつたから、そんなものはあるまいと思召すかも知らぬが、焉んぞ知らん、鎌倉に於てはちやんと有つた。鎌倉では此の鎌倉の都府を支配するものとして二の奉行と云ふものを置いた。奉行は第一を檢斷奉行、もう一つを地奉行と云ふ。此の檢斷奉行と云ふは今の言葉で云ふと裁判及司法警察を掌る。其時にそんな言葉はありませぬ。治奉行と云ふは之れは行政の方だ。して見るとジャスティス(Justice)と、アドミニストレーション(Administration)の二つに分れて居る、餘ほど面白い。

二二一 問屋業の發達

それから都府と云ふものが段々開けますと、卸賣的の事業が段々増加して來た。昔のやうに自分で拵へたものを見世へ並べて夫れをチョコ〜と賣ると云ふことでなしに、随分遠隔なる地方から澤山品物を積込まして、さうして夫れを大規模に賣捌くことになる。是れは歐羅巴に於ても非常に早く起つた。日本に於ては既に王朝の時代に於いて邸屋或は邸家と稱するものがあつた。此の邸屋と云ふのは即ち卸賣的のものである。是れが卸賣の源になつて居る。鎌倉時代になりますと之れを問丸と云ふ。それから足利時代に至つて之れが問屋となる。其の問屋が訛つて今日に至つてはトンヤと言つて居る。即ち邸屋、問丸、問屋と四段に變遷して來た。是れなどは丁度中古に於いて歐羅巴でも發達すれば、日本に於いても發達して居る。此の問丸或は問屋と云ふものが一つ歐羅巴と同じやうな状態を備へて居ると云ふこ

とは、何時も之れが宿屋と關係があることである。問丸と云ふものは大抵宿屋と云ふものが關係して居る。さうてせう、遙々と遠國から出て來て商賣をするのだから是非其處に泊つて居ると云ふやうな譯で、昔は分業が盛んでない時代であるから、卸賣の商人、それから宿屋と云ふものはくつ付いて居る。斯う云ふ様になつて居る。現今日本に於てもそんな事がないでもない。随分田舎から出て來て商賣をしようと云ふ時に宿屋が其の相談に乗ると云ふことである。是れは宿屋と商賣と關係があるので、昔は殊に特別の關係があつたが、歐羅巴でも矢張りさうである。是れは一々事實を御話すると面倒になるから、唯あつたと云ふことにして置く。

二二三 兩替業爲替業の發達

それから、斯う云ふ風に發達して來ますと、兩替若くは爲替と云ふことが必要になる。殊に爲替は必要であらう。遠國からやつて來るのに、是非昔の錢だから一文錢

と云ふ奴、之れを背負つて來なければならぬと云ふと大變な事である。重くて仕様が
がない。重くて仕方がないのみならず、前に御話した通り海賊或は陸賊と云ふもの
が横行して居る。古風の芝居を見ましても、必ず庚申堂の中から泥坊が出て來て
どん／＼取つてしまふと云ふ場がある。是れは昔の實際の景況であつたと思ふ。歐
羅巴でも其の通り。そこで兩替と云ふものがどうしても必要である。是れは信用取
引の一端である。而して是れは歐羅巴で見ますと、一番始めが伊太利の羅馬若しく
はフロレンス、是れが抑も始めてある。何となれば此羅馬やフロレンスに於いて
は最も都府經濟が發達をなして居る。従つて斯う云ふことが矢張り早く發達をし
た。日本はどうであるかと云ふに、都府の制度が最も早く纏まつた所の鎌倉に於い
て始めて之れが起つた。之れは鎌倉に於いては替錢と言つた。即ち爲替のことであ
る。歐羅巴では羅馬とフロレンス、日本では鎌倉、都府の制度が整つて來た所に
は、それに伴つて爲替が發達する。此の爲替が發達すると銀行類似の事業が出來て

來る。それから之れが本となつて、足利時代の末から遂に徳川氏に及んで日本に於
いても銀行的の業務が非常に發達した。徳川時代に於いても尙ほ御話したのであ
るけれども、是れは略して置く。

二四 中古に於ける泉州堺と 歐洲都市との比較

さてさう云ふ事を以て見ると日本人は商業に於いて或は西洋人に優つて居ると云
ふ斷定も下し得るかも知らぬ。それから足利時代に於いて最も發達しました町は今
御話した境が第一であるが、其の外には山口、兵庫、小田原、大阪などと云ふ所も
最も能く發達した。是れは商工業専門の地として發達した。其の中で最興味のある
所は矢張り泉州堺である。此の泉州堺の状態を見ますと歐羅巴にそっくりだ。それ
は第一に自治制があります。自治のことは歐羅巴にてはオートノミーと云ふ。此の

商工業が發達するに従つて、都府の自治は發達して來る。是れは都府と云ふものが段々隆盛に赴くに從つて、各方面に於いて勢力を取得したる故に、さう云ふ有様になつたものと見なければならぬ。所が日本の泉州堺は非常に自治制が發達した。第一に市の政治を議しまするに市會とか市參事會とか云ふものは、是れは明治時代に發達したものだと思召すかも知らぬが、決してさうでない。堺に於いて已に業に之あり、尤も名前は違ふ、會合衆と云ふ、之れが市會に當るものだ。尤も今の市會より權限は廣い。此の外に十人衆と云ふものがある。此の十人衆といふものは政治の根本で、今言ふと市參事會に當らう。若し其時分に電車が堺にあつたら之れを市有にしたかも知れない。若し市有にしたとしたら是れが其の決議をしたのだ。兎に角十人衆と云ふものがあつたのである。それから歐羅巴の都府に於いても段々自治と云ふものが發達しますと、メルソナリーと言ひまして傭兵を澤山置いた。是れは歐羅巴で其の時分段々食ふことに困つて來たやうな者とか或は武家の次男坊とか三男

坊とか云ふやうなのが段々知行も宛がはれることが少く、扶持米も少くなつて來ると云ふ奴が、大きな町へ來て傭兵となる。給金を貰つて傭兵となる。日清戰役の時に出ました支那の兵隊のやうなものである。尤も是れより氣が利いて居つたらう。兎に角是が皆金で雇はれる。日本にはそんなものはなかつたらうと思召すかも知らぬが、又焉ぞ知らん、是れが堺にある。浪人を雇つてちやんとやつた。方々に彷徨つて居る者を雇つて來て兵を置いた。即ち堺に常備軍を置いた。愈々誰か來て堺を進撃しようとする時には此の浪人共が直に干戈を執つて立つ。實に偉いものだ。今堺へ行くと大濱で涼む位なものであるが、昔は堺といつたら偉いものであつた。歐羅巴の昔の大なる町に決して譲らない。それからして堺の商人と云ふものが偉い者であつた。それで兎に角斯くの如く發達を致したのであつて、此の商工業者と云ふものゝ富裕なる者がよると、武人社會と云ふものも非常なる利益がある云ふ所から致して、商工業者には厚く保護を加へる。武將から厚く保護を加へるのみならず、

富んだ所の商工業者と云ふものを成るべく自分の領地に引付けようと云ふことを努めた。是れは歐羅巴の封建諸侯の習はしてある。是れは無理ならぬ話である。日本でも矢張りさうだ。太閤秀吉が本願寺が籠つて居た石山城を改築して、段々大規模に大阪市と云ふものを盛んにしようと思ふので、堺の富豪を大阪に招き寄せた。それから大阪が一躍して盛んになつたが、其の代り堺は全く衰へてしまつた。是れも一例である。其の外小田原北條などもさうだ。何れも大きな所からして商工業者を誘致したのである。それから十萬石位な小さな大名の都府でも其の發達の歴史を見るに、其の通りである。大阪から町人を呼んで来たとか何とか云ふので、町名にまで夫れが付いて居る。町名の沿革を調べて見ると是れが非常に多い。例へば吹屋町と云ふのは大抵の城下にある。吹屋町は金を吹く。是れは大阪とか京都とかから其の工業者を呼んで来て、其の處へ置いたと云ふことを示して居る。英吉利でも和蘭から職工を雇つて来て、あの國の色々な製造を改良したと云ふ話がある。是れは日本

と西洋と違はないのである。

それからもう一つ之れに就いて御話するのは、此の商人と云ふ者が段々大名の保護を受け且つ大名に利益を興ふると云ふ所からして段々勢力を得て来た。歐羅巴では遂に政治上の事にたづさはると云ふやうになつた。大名と云ふものは何處でもさうであつたが、戦は知つて居る。戦をすることは知つて居るけれども、財政と云ふものは殆ど知らぬ。丸て御坊さんで、唯金を使ふ丈だ。戦をして人を斬ることは知つて居る。金を造ることは知らない。それだから到る所大名の財政の困難と云ふものは甚だしい。中にはさうでない大名もあつたけれども、大抵は先づさうであつた。そこで財政が裕でない所へ持つて来て、自分の都府の商工業が發達して、商工業者が非常に金持になつたから、つい之れに融通を頼む。此の融通を致しましたことが歐羅巴に於ては銀行業の株式會社の嚆矢である。大名や國王に金を用立てる爲めに聯合して之れを爲すことになつた。是れは株式組織の始めである。

二五 金融と株式組織の發達

兎に角商人と云ふものが始終融通する。そこで政治上にも嘴を容れることになつた。獨逸の中古に於て有名なるフツゲル、エルゼル伊太利のメデシ、ペルツチーなどと云ふもので、其の外にもあるけれども、是れが即ち今の日本て言へば三井八郎右衛門、鴻池善右衛門、住友吉左衛門と云ふ人である。斯う云ふ有力な者が出て來て、是れが政治上に權力を有つて來た。而して是れらの人と云ふものは皆王侯にも優る生活をなして居た。堺の商人も亦同じである。中々どうして偉いものだ。第一才藝の點から言つても、其當時の武將と云ふものを優に壓倒して居る。例へば連歌の遊び、茶の湯の遊び、其外生花何てもやる。御承知の通り足利の末には茶の湯と云ふものが大變に流行つたもので、此の時の堺の商人と云ふものは皆名人である。そののみならず亦色々な出版物が盛んに出た。此の出版物には有益なものが隨

分澤山ある。殊に文化と云ふものは堺の商人が造つたと言つても不可はない。それから歐羅巴では此の經濟と云ふものを非常に尊ぶから商人を尊んだのも無理ならぬけれども、日本は由來尙武の國であるから商人は蔑すんだらうと思召すかも知らぬが、堺の町は決してさうではない。其の動機と云ふものは歐羅巴と同じことで、御承知の通り足利將軍と云ふものは驕奢に耽つて非常に國帑が疲弊して居つた。且又之れに加ふるに兵亂を以てした。色々な戰などがあつて、財政益々窮乏を告げて居つたのである。其の時分の足利の政府と云ふものは此の堺の商人に金融を頼んだ。さうすると堺の町人の方では宜しいと言ふので、随分貸した。丁度歐羅巴のフツゲル、エルゼルなどが當時の國王諸大名に金を貸したと同じだ。此商人から金を借りまする風俗は足利に始まつたかと云ふとさうではない。既に北條氏の時にもある。之れを借上金と云ふ。併し其の實借上も借下も同じことである。矢張り利息を付けて借りる。唯上の力で借りるから借上と云ふ丈けて、理窟は同じことだ。北條

氏の時に於いても既に此の借上金と云ふものはあつた位で、それで此の政府に金などを立する所の人はどうしても勢力を得て来る。其の當時の富豪を稱して何々老といつた。之れは尊んで言つたものである。それは歐羅巴の歴史を見ても矢張りさうである。エルダーと云ふ字が付いて居る。政府に金を貸したり、國王に金を貸したものをエルダー即ち長老と云ふ。詰り同じことである。して見ると、都府と云ふもの、發達は矢張り東西其の撥を一にして居ると言つて然るべしと思ふ。

二六 組合組織の發達

次に申上げたいのは商業組織のことである。組織と言ひますと即ち商業と云ふものを如何なる具合にしてやつたか、如何なる團體を以て之れを行つたかと云ふ問題である。今日の商賣と云ふものは彼の勝手貿易と同じで、人民と云ふものは各々自由商業を営むことが出来るやうになつたけれども、中古の状態を見ると、さうで

ない。團體と云ふものがあつて、此の商業と云ふものに色々な制限を加へ若くは其の上に規則を設けて居る。先づ歐羅巴から御話して見ると、歐羅巴ではギルド(Gild)獨逸語でツンフト(Zunft)と云ふ、之れは通例組合と譯してあるが、此の組合と云ふもので中古の商賣をやつて居つた。即ちギルドと云ふものは商工業者の一の團體である。初め此のギルドと云ふものが歐羅巴に起りましたのは互に相助け合つて行かうと云ふのが目的であつたので、是れがギルドの起原である。而して夫れが段々發達して参りまして、種々なる方面に勢力を得ることになつた。それで此のギルドにも二つの種類があり、即ちメルチャント・ギルド(Merchant Gild)、クラフト・ギルド(Craft Gild)と云ふのがある、メルチャント・ギルドは商人組合、クラフト・ギルドは手工業者組合である。其時分は御承知の通り機械工業と云ふものはなかつた、夫れで手工業であつた。此起りは色々議論があるけれども、先づ要するにメルチャント・ギルドの方が先きであるらしい。それは何れにしても宜しいが、兎に角商人

組合と手工業者組合の二つが成立つて居つたのである。何れもギルドなるものは獨占若くは專賣と云ふ權利を有つて居つた。例へば靴屋なら靴屋組合と云ふ一つの組合がある。さうして其の組合以外の人は靴を製造することが出来ないといふので、即ち是れが專賣の特權を有して居ると云ふ意味になる。

二七 組合と專賣特許權

尤も後にはギルドが大變細かく分れまして非常な面倒な事になつたことがある。例へば同じ靴でも靴を製造する組合、それから靴の革を製造する組合と云ふものは丸で別になつたこともある。それから面白い訴訟がある。鶯鳥を飼ふ鳥屋組合、家禽組合、之れと料理屋組合と云ふものが屢々喧嘩をしたことがある。其の喧嘩をしたのはどう云ふことかと云ふと家禽の組合と云ふものは鶏を殺して賣る丈なら宜しいが、内々煮て食はせたりする。書生などが來ると一寸鶏肉を煮てビールで一杯

やらする。さうすると料理屋組合が承知しない。鳥屋は鳥を飼つて賣る丈のものであるに、其の肉を煮て食はすと云ふ法はない、それは料理屋の專賣の權利を侵害するものである。斯う云ふやうなことで以て訴訟を起した例がある。けれどもさう云ふことはどうでも宜しいが、兎に角此の專賣と云ふものがあつたのである。是れ即ち組合の特質である。所で日本ではどうであるかと云ふと、日本にも之れに丁度似たことがある。鎌倉時代に於いては北條義時の時に組合法を定めました。尤も此の組合法の具體的に確定をしたのは最明寺時頼公の時代である。謡曲の鉢の木の中に在るワキの人だ。あの時頼の時分に出來ましたのが即ち組合の具體的に定まつたものである。其の時代には式と言つて居る。例へば大工式とか石屋式とか言つたものである。此の式と云ふものが後には座と云ふ言葉になつた。材木座であるとか何とか云ふものが出來て、是れが專賣特許權を持つて居る。此の座と云ふものが即ち丁度歐羅巴のギルドと云ふものに當ると云つて宜しい。茲に一つ面白いことがある。座

と云ふことは坐るとか物を置く所とか云ふところだ。詰り是が起りと云ふものは物を棚へ載せて陳列したから座と云ふ字が出来たらうと思ふ。そこで歐羅巴のギルドと云ふ字の語原を調べて見ると、是れはアシユレーと云ふ人の英國經濟史に出て居るが、語原はシート(sheet)と云ふ字である。取も直さず座である。東西名前まで同じだ。是れは餘程面白い。それからして、此の座と云ふものが出来ると、專賣特許權を有つて居る外に尙ほ色々な資格を備へて參つたのである。第一に此の專賣特許權を有したるが爲めに、特別な保護を政府から受けた。是れが第一の性質である。即ち座の專賣特許權と云ふものを侵害する者であるならば政府は直ちに之を捕へて罰する。此の座以外の者が專賣特許權を侵して、私に物を賣るのを協賣、振賣と唱へた。此の協賣振賣と云ふものは即ち犯罪である。直ちに罰せられる。是れは歐羅巴でギルドの專賣特許權を侵したるものは重く罰せらるゝと云ふことに當る。詰り同じことである。

それからして次にギルドの性質と致しまして、歐羅巴でも日本でも其の組合員の資格と云ふものは世襲である。さうして是れは賣買質入書入することが出来ないこと云ふのが原則である。それから此の組合員になるべき資格と云ふものは非常に面倒なものである。ですから下のやうなことが歐羅巴の書物に書いてある。ギルドの組合員となつて一の工場主にならうと云ふのは、どうしても工場主の後家様の入夫になるより外方法はなかつたと云ふ。日本でもそんな事が時々ある。宿屋の亭主等にはそんなのが多い。工場主が一人死にますと後家様が出来た。其の後家様の入夫となつて組合員たる資格が得らるゝと云ふ有様であつたと云ふことである。餘ほどむづかしい。日本に於いても矢張り原則としては歐羅巴と同じであつた。併し、日本では足利時代に於いては賣買質人は實際に行はれて來た。行はれては參つたけれども矢張り法律上の原則として世襲と云ふことに致して、賣買讓與と云ふことは禁じてあつた。是れが即ち東亞又揆を同じうする所の一の現象である。

二八 組合は納税の單位となる

それから次に此のギルド即ち組合なるものは納税單位といつて税を納むる單位となつた。それはどう云ふ事かと云ふと、只今では税は個人々々が皆納める。所が其の時分はギルドと云ふものが纏めて税を納める。政府では此ギルドは何程、此の組合は何程の税を課すると云ふやうに、其のギルドに由つて定めて、さうして課税した。固より今日のやうに法律が綿密ではない時である。さう云ふ時代にあつては、一人一己から税を取るよりも團體で纏めて取つた方が便利である。此れらの便宜上もある所からして、納税單位となつた。日本に於いても矢張りさうであつた。政府といふものが何を目當に色々な御用金を申付けたかと云ふと即ち一種の株に對して御用金を命じたのである。一人一己に對して御用金を命じますよりは非常に樂である。それで皆此の團體に對して税を課したと云ふ譯である。して見ると是れは即ち

相互の間の利益と云ふことになる。それで此ギルドに付いて早稻田大學出版部發行拙著商業史講義に可成り詳しく書いてある。参照せられたい。

二九 商業の發達と一定の原則

また其の外色々事實を擧げて見ましたならば澤山類似の點はある。ありますけれども、重なる事實は凡そ前に述べたる如きものである。して見ると此の人間の商業發達と云ふものには何か一定の原則があるらしく見ゆる。商業の發達史と云ふものには何か一貫の理窟があるらしい。さう云ふ斷案を下しても殆んど差支ないと思はれることになる。私などはさう云ふ理窟を選ばうと思ふのである。是れは商業ばかりではないので、萬般の人間の事業の根本たる所の思想界と云ふものに就いても御覽なさい。世界の思想の變遷は段々分析して見ると、何れの國に於いても丁度五期に分れて居る。昔から今日まで大約五百年を一期として、五期の變遷をして居

と思ふ。五百年毎に一期をなして變遷して來て居るといふことは、決して偶然ではあるまいと思ふ。是れには何か一つの原則がありさうに見える。而して此の五百年間の變遷と云ふものを段々吟味して見ると、何時でも歐羅巴と亞細亞の接觸から來て居る。何となれば基督教と云ふものが羅馬に這入りまして、偶像教を打倒した。斯う云ふことになつて居る。それから後五百年経つて、マホメットが亞細亞から出て來まして、基督教とマホメット教との衝突があつた。遂に彼の十字軍が起つたと云ふことは、取も直さず亞細亞と歐羅巴の接觸である。それから後に葡萄牙、西班牙等が、段々航海業を盛んにして貿易が發達して來たのは何であるかと云ふと、是も印度へ行く道を求めよう、何でも印度へ行つて金を儲けようと云ふ考へから起つた。彼のコロンブスなどと云ふ海賊は皆さう云ふ考へから起つたのだ。即ち西洋と東洋との關係から事が起つて居る。それから文明東漸の結果として歐羅巴の勢力が段々亞細亞大陸に扶植せられるに及んで到頭ぶつつかつたのは日本、御同様

にぶつつかつた。そこで日露戦争が起つた。滿洲の野に於いて彼の大軍を蹴破つたと云ふ、實に愉快である。愉快であるけれども、是れも矢張り原則から言ふと亞細亞と歐羅巴の接觸である。さうして今度は文明東漸ではない。日本が立憲政治になつたと云ふことは、亞細亞の支那や斯波は勿論歐羅巴の露西亞にまで政治の改革を行はしめた。是實に御同様名譽とする所である。斯の如く思想界に於いても亞細亞歐羅巴の接觸から導かれて來て、而も最後の五百年、二十世紀は我日本が歐羅巴の思想界を將に指導せんとする所の責任ある地位に立つたと云ふことは實に目出度い話であるが、夫れならば前に言つた通り商業と云ふものはどうしても日本は十分に出來ぬと云ふ筈はない。萬般の事業の根本たる所の歐羅巴の思想界にさへ打撃を及ぼしたる日本が、商業に於いて獨り歐羅巴に負けると云ふ法はない。けれども夫れは西洋と日本とは質が違ふなどと理窟を言ふ人があるが、只今申上げた通り中古の商業の歴史を考へて見ると、日本も歐羅巴人も、歐羅巴人中でも殊に新進の勢を

有つて居る獨逸民族の發達と、其趣きを同じうして居ると云ふ所から判斷を下して見ると、日本人も纏て此の二十世紀に於いては思想界は勿論のこと、商業と云ふものを以ても、今度は文明東漸所ではない、文明の中心と云ふことにならうと云ふことは期して待つべきであらうと思ふ。それ故に私は此の中古の商業と云ふ御話をしたのである。

革命の徑路

一 諸國の革命

革命と云ふと、誰れでも、一七八九年、即ち我が寛政二年の佛國大革命のことを思ひ起して來るであらう。世界に起つたる革命と云ふものは、固より佛國に限つたることではない。支那歴代の興敗も、革命であつて、キリアム王を和蘭より迎立したる一六八八年の英國革命、カザリナ第二世の勝に歸したる一七六二年の露國革命、北米合衆國の獨立となつたる一七七六年の米國革命も、皆革命であるし、其他一七七年と一八〇九年とに於ける瑞典、一七九五年、一八一三年并に一八三〇年に於ける和蘭、一七〇四年、一七九五年并に一八〇三年に於ける波蘭、一八三〇年、一八四八年、一八五一年并に一八七〇年に於ける佛蘭西、一八六八年と一八七四年と

に於ける西班牙、一八八九年に於けるブラジル、一八九一年に於ける智利、一九〇五年に於ける那威、一九一〇年に於ける葡萄牙等、皆、革命を生じたのである。しかし、一七八九年の佛國革命と云ふものが、其の及ぶ所の影響が、甚しく大きかつたのと、世界の大勢に動搖を來すやうな大事件であつたので、歴史家も、普通人も誰れでも、革命と云ふと、之れを連想して來るのである。

そこで、姑く佛國革命の事を述べて、本論の發端としようと思ふのである。時は、一七八九年七月の十四日と云ふ日に、佛國巴里の暴徒が、バスチーユを襲撃した。此れからして巴里は、混亂紛擾の巷と化したのであるが、バスチーユ襲撃の時には、時の皇帝路易第十六世は、エルサイユ城に居た。擾亂の報知を得て大いに驚いて、左右を顧みて、叛亂かと云つた。すると傍に侍つてゐたリアンクール公と云ふのが其の聲に應じて、陛下、叛亂となし召し召し召し、こは革命にこそ候ふべけれど、かやうに申した。實に叛亂は、革命となつたのである。遂に皇帝が、斷頭臺上の露と

化し去ると云ふ大々的悲劇を演出したばかりでなく、隣接の諸邦國は、自國に危難の及ばんかと云ふことに懸念し、大に危懼して、上下動擾したことは、歴史の上に詳かなことであつて、喋々を要しないことである。

さて、此の佛國革命と云ふものは、實は避くべからざる命運に依つて避くべからざる結果を生じたに外ならぬのである。中古以來、封建の餘弊は積り積つて、國民の富力を銷磨し盡したと云つても差支ないやうな有様に陥つて來たのは、佛國の昔日の形勢であつた。第十六世紀又は其の以後に至つても猶、古來の弊習を存してゐて、到底、時勢の推移と相容れないと云ふ状態に立ち至つたものだからして、遂に革命は勃發したのである。

二 叛亂と革命

佛國革命は、實に避くべからざるの命運によつて、避くべからざるの結果を呈出

したのであるが、前に列擧したる諸國の革命も、史實によつて、詮索を遂げて見ると、同じく、此の斷案以外に逸出せないのである。

革命の原因結果は、固より單純なる者ではないのである。しかし、前に述べたりアンクル公の所謂叛亂と革命との差異からして、先づ略論してかゝらねばならぬ。リアンクル公の云つた叛亂革命の差異は如何なる意味で云つたのか、詳細に論じたものもないから、よくは分らぬけれども、實際、革命と叛亂との間には、底が存してゐるのである。之れを有機體に喩へて云つて見ると、醫療の餘地ある疾病と危篤に陥つたる病症とのやうなもので、健康状態に在るのでないと云ふことは、雙方相同じことであるけれども、一方は救ふことが可能である。而して他の一方は救ふことが不可能である。かう云ふ差異があるのである。叛亂と革命も、之れと同じことであつて、叛亂は、鎮撫し得べきものであつて、而して、其鎮撫が出来た後に、社會國家の常態を回復することが可能である。之れに反して、革命と云ふもの

は、政治上と云はず、經濟上と云はず、宗教上と云はず、社會的事件と云はず、社會の根本組織を滅し盡して、而して、新に新革命を生み出すのである。

歐洲で、工業革新、即ち、インダストリアル、レヂリエーションと云ふことがあつて、中古以來の工業組織を更改して、社會の面相を一變した、そこで機械工業と云ふものが發達して來て、之れと同時に、家内工業は、或る種の工業に限定されて來ると云ふ状態に、段々と推し移つて來るやうになつて來た。況んや、中古の座制などは、其の權威を消失して了つたのである。かう云ふ風に、時勢が一變すると、新状態に適應して行くことの出来ないものが、澤山に出來て來るのは、當然の趨勢であつて、さう云ふ譯合からして、歐洲で工業の新状態が現出して來ると同時に、職工労働者の騷擾と云ふものが、屢々起つたのである。しかし、時勢の趨向と云ふものは、之れが爲めに抑止せらるゝことはなくつて、駸々乎として進歩して、遂に現今の經濟状態を見るに至つたのである。我が邦、維新の時に就いて見ても、同じ

様なことがある。王政復古の業が成つて、世運が遽に變じてまゐつたが、此の際に於て、新政の爲に舊時の權威を失つたり、又は新政が己の意に満たぬ所からして、不平の徒が出来て、異圖を挾むものが諸方に起つた、しかし、大勢の趨く所は、之れを奈何ともすることが出来ないで、此れ等の徒は其の志を伸ぶることが出来ないで止んだのである。以上の事はいづれも多少の血を見たのであるけれども、一旦治ると、社會は常調を失はないで、進んで行つたのである。かやうな騒動は、叛亂と看做して宜しいのである。

革命と云ふことになる、其趣が異なつてゐるのである。前に述べた佛國革命は如何であるか。社會の根基を動搖轉覆して、而して新に社會を建造したのである。王政復古と稱する明治維新の變は、何うであるか。漢土の所謂革命と云ふことは固より當らない。易に湯武革命順乎天而應乎人とあつたり、尙書正義序に湯武革命而誓誥興とあつたりする所からしては、天子の朝が交替しなければ革命と云ふこ

とは出来ないのであるからして、此の字義よりすると、明治の政變には、之れを適用することが出来ないのみならず、此の義から推して行くと、我が邦には、革命と云ふことはない筈である。故に、革命と云ふ語を此の場合に用ふるのは、或は當を失してゐるであらう。しかし、苟も社會の根底に一大變動を及ぼすべきものならば、均しく是れレゾリユーションであつて、概括して革命と云つて宜しい。我が明治の政變も亦、革命の一種と云つて妨はなからう。

三 革命と社會の根基

革命は、社會の根基を變ずるもので、叛亂は、一時の動搖に止るものだとすると、結果によつて、二者の區別をすることになるのである。それであるから、法律は、内亂罪に就きては、規定を設けてゐるけれども、別に革命罪と云ふものは、之れを設けてゐないのである。革命と云ふと、其の結果は、既に法律の範圍を超越してゐ

るものであるからして、かやうな結果を生ずるのである。

革命叛亂の二者は、結果によつて、其の差別が立つものだとする、均しく革命となるべき性質の動亂でも、時としては、叛亂で終つて了ふものもあるし、又、同じ叛亂に歸すべき性質を有してゐるものでも、往々にして、革命になつて來る者があるのである。目下の時事問題に屢々引用されてゐる所の太平亂の如きを見ても、其の宣言に據ると、滿洲朝廷を顛覆するの目的であつたからして、成就したならば、立派に革命と稱して然るべきであるけれども、清國政府が外國人の援助を藉つて、之れを鎮定したから、遂に清國の國家社會に、變調を來すことが出来なかつたのであるからして、只今日に至るまで、叛亂だと歴史に傳へられてゐるので、其首領であつた洪秀全も、自分では、太平王と稱したのだけれども、賊魁と云ふことになつて、其の徒黨は、長髮賊だとか太平賊だとか云ふ名稱を冠らされてゐるのである。

四 姑息の手段は不可也

是れに由つて之れを観ると、革命は、社會の根基を顛覆して、新に此の社會を順調に回復するの力あると否とによつて、或は革命の眞性を發し、或は、叛亂として止むるのである。四十三年の葡萄牙でもよく王政を顛覆して、新に秩序を建立したので、革命の稱を空しうせざることになつたのである。されば、社會の順調を回復するの力あると否とが、大勢の趨向を決する所の要素となるのである。

しかし、革命が、叛亂に終つて了つても、避くべからざるの狀態に陥つて來ると、社會は、早晚、革命の慘禍を見ないでは止まない。支那の太平亂でも、一旦、外國人の方で、裁定には歸したけれども、滅滿興漢、言ひ換ふれば、社會の均調を紊さんとせる滿洲政府の役人を倒さうと云ふ風潮は、潛勢力として、國中に伏在してゐるのであるから、機會にあらば、革命は、勃發せざるを得ないのである。佛國の

革命にしても、其の前からして社會の革新をしようとする云ふ機運は熟して來てゐたの
 がある。葡萄牙の革命でも、王室の腐敗、政黨の腐敗、國民の貧困、其の他あらゆる
 原因が錯綜してゐて、避くべからざる革命の勃發を促してゐたのである。かう云ふ譯
 であるからして、革命と云ふものは、實に避くべからざる事になつてゐる社會に在
 つては、一時、叛亂で了つても、又、大勢の趨く所を奈何ともし難いことになるので
 ある。徳川氏の天下も時勢の推移と共に、革命は熟してゐたので、外交の發生と共に
 に、遂に勃發したので、此の大勢は、如何にしても、人力を以て抑止することは出
 來なかつたのである。徳川幕府は、既に老病に罹つてゐたのである。社會の趨勢は、
 既に其の死期を促してゐたのである。故に偷安の策を弄してからに、公武合體な
 どと云ふことをやつて見たけれども、寸毫の效顯もなくつて、空しく、外様の雄藩
 に屈服しなければならぬと云ふ命運に陥つたのである。滅亡の際に至つて、小策を
 弄したり、暴力に訴へなどしてからに、聊か、滅亡の期を永くしたには相違ないけ

れども、それは、病人の死期に際して、カムフラールの注射によつて、少時の間、心
 臓の作用を保持するのと擇ぶ所がないことであつて、革命の機運、既に熟してゐる
 場合には、舊社會は、滅亡して、新社會と更迭する時期が、到達してゐるのである
 からして、劇薬を投じて、一時を永くすることはあつても、死は、到底、免るべか
 らざるものである。

此の際に在つて、小策を弄するは、庸醫の病を治すると同じことで、病源を究め
 ずしてからに、薬を投じたり、診断を誤つて投薬をしたり、不必要なる薬を服せし
 めたり、薬の爲めに、却つて病を重くしたり、無益無害の薬を用ひて、一時を糊塗
 したりする。皆、處置を誤つたものであつて、遂に、人は病に死せずして、醫に死
 すと云ふ格言を事實にすることになるのである。畢竟するに、病を治するの法を得
 ないのである。國家社會が、病に罹つたときにも、之れを治するに法を以てするな
 らば、病魔を驅逐するのに、さほど難いこともないことになつて、動亂が革命とな

らないで、叛亂で止んで、そうして、社會は順調に回復することになるのである。それを、庸醫の治術を以て、之れに當ることになると、可治の病症も不治の病症となつて、遂に身體の永滅を期せねばならないことになるのである。しかし病、膏肓に入つて來てゐる曉にて、如何なる大醫を聘して來たつても、到底、それを救治することは出來ないのである。老齡の人が、老病の特徴たる萎縮腎に罹つたときに醫療によつて、一時佳良の状態に復することもあるかも知れないけれども、醫家の施す所は、一時姑息の療法に止るのであつて、到底滅亡を免るゝことは出來ないのである。目下清國の革命亂も、一時落着くとしても、到底永くは、現状を維持し難いのである。

五 社會の權衡

革命避くべからざる社會ありとせば、其の社會は、如何なる社會であるかと云ふ

ことを研究せねばならぬ。古來からの革命を觀察して見ると、いつでも、社會に甚だしき不權衡が起つてゐるのが原因になつてゐる。此のことを、一々史實に就いて論ずることは、紙幅が許さないから、姑くこれを措くこととするが、常識を以て判斷しても、よく分ることである。物が權衡を保つてゐる間は、動きはしない。之れと同じ理窟で、社會の會員が、相互に權衡を保つてゐるときには、動亂の起るべき必要がない。社會の裡に、無理が出来るから、動亂が起るのである。一家内の中に就いて見ても分る。親子兄弟姉妹、各其の分を守つてゐるならば、悲劇は起らない筈である。然るに親父が、悪い事ばかりして、難きを子に責めたり、兄が兄權を振り廻して、弟を虐待したり、姉が無理ばかりして、妹を苦しめたりしてゐると、是れが積り積つて、一家の波瀾が起る。父、父たり、子、子たり。兄弟和樂して且つ湛しむと云ふ風になつてまゐるときは、一家に風波の起る氣遣ひはないのである。之れと同じことで、社會の根底に、何か無理が起ると、遂に波瀾の素因が起

つてくるのである。要するに權衡が甚だしく亂れて來るのが原因なのである。
 權衡と不權衡と云ふことは、時勢の推移と共に、其の面相を變へてゐるのである。
 今は、甚だしき不權衡と看做してゐることも、昔はさほどでないことがある。今、家
 族のことを例に引いて見よう。封建時代に在つた武士の家族を見ると、其の家長た
 る人は、家祿を有してゐて、一家眷族、皆、其扶持によつて生活してゐたのである
 から、家長の權力が、餘程大きなもので、子でも、弟でも、絶対服従の義務を有
 してゐたと申しても差支ないほどである。しかしながら、今日の世になつては、子
 と云ふものは父の家祿を襲ぐのではなくて、己の力量で、家を立て、行くのである
 から、昔のやうに、親が無理なことをして子を困らせても、それで済むと云ふこと
 にはならぬ。それを、昔のやうに、一から十まで、父の云ふ通りになれと云つたつ
 て、それが理に適つてゐるならば宜しいけれども、理に適つてゐないことであつた
 ら、親子喧嘩も絶えまい。はては、息子の出奔も出來よう。娘の自殺も出來よう。

あるとあらゆる悲劇が起つて來るのである。之れと同じことで、羅馬時代には、羅
 馬時代の社會状態がある。第二十世紀には第二十世紀の時勢事情がある。羅馬時代
 には、奴隸制度が行はれた。是れは、人口稀薄で、未開發の土地が多かつた時代に
 は、必要な制度であつて、奴隸所有主の絶対權力は、時勢の趨向と、敢て背馳して
 ゐなかつたに相違ない。しかし、人口増加して、生産の狀態が、昔日と其の趣を
 同じうしないと云ふ有様になつてゐると、奴隸制度を根基としてゐる社會組織は、
 到底、成り立つものではないのである。それを辨へないで、猶、奴隸制度時代と異
 らざる壓虐を加へて行かうと云つたなら、社會の不權衡と云ふものは、甚しく明
 白となつて來るのであつて、かやうになつてくると、壓虐されたる社會が蹶起して、
 制軛を擺脫しようとすることになるのは當然の徑路である。君主獨裁又は寡頭政治
 の世、既に去つたるの今日に在つて、猶、專制君主主義を行つたり、少數の閥族が
 政權を獨占したりすると、權衡の失當が、益々明白になつて來るのである。社會の

人々が之れを自覺するに至るのも、又、時勢の推移によつて然るので、社會の變遷此の期に至つてまゐると、革命を起して、社會の順調を回復しようとする運動は、必ず起つて來るのである。それを、權利を有してゐるものが、優々緩々一日の安を偷んで、改良上進に勉むることがなかつたならば、茲に革命の機運は、熟してまゐつて、機會だにあらば直に勃發して來るのである。

以上の事實からして推斷して行くと、革命の徑路には、三個の要素があると云ふことを得るのである。第一が、社會の權衡を失することである。第二が、利益の地位に在るものが、其權力を濫用することである。第三が、利益の地位に立つてゐるものが、時勢の推移に暗くして、刷新を行はないことである。是れから、其一つ一つに就いて略論して行かう。

六 社會の權衡を失する場合

第一の社會の權衡を失してゐると云ふことは、如何なる意味であるかと云ふと、重複に渉るけれども再び、羅馬の奴隸制度のことに就いて云つて見よう。奴隸制度が、社會の根本であつた時代には、奴隸と奴隸所有主とは、互に同情を有し合つてゐた所の、誠に親密なる關係を有してゐたのであるが、社會の狀態が一變して、奴隸の生財が、涉々しく行かなくなつて來ると、此の關係は、全く變じた。是れから以後と云ふものは、壓虐暴戾至らざるなしと云ふ有様になつて、奴隸を鞭つ、其身體生命を傷害する。甚しいことになつた。封建時代の頑固親爺が、時勢の推移も知らないで、無暗に、息子に無理を云つたり、難きを責めたりするのと、同じやうになつて來た。是れでは、責めらるゝものは、遣る瀬がないことになる。如何にしても、社會の改革を思ふやうになるのである。怨嗟野に満ちて、民、亂を思ふと云つたり、四海困窮して天祿永く終らんと云つたりするのは、此れ等の事である。政治上に就いて見ても、よく分る。少數の貴族が政權を獨占して、萬民を虐待して、そ

して年所を経て行くならば、遂には國亂となる。武力を以て之れを戡定した所で前日と同じやうな儉安姑息の策を弄してからに、壓虐、毫も前日と異ならざることであつたならば、積る怨は遂に勃發して、重大なる動亂となるのは火を賭るよりも明かなことである。藤原氏の專權と云ふのは、如何であつたか。其の祖先が、皇族と合體し奉つて蘇我氏の專横を挫折した。是れ一種のレヂリューションであつて、是れからして、社會の基礎を立てなほした。それから、後は藤原の權力と云ふものが、漸次、強大となつて、また、權衡を失ふやうになつて、武族の跋扈となつた。鎌倉覇府が、權力を專にする事久しきに及んで來ると、今度は又諸國武族の亂となつた。足利が、義滿時代に全盛を極めて、それからと云ふものは、漸次、咲いた花に蟲が喰ひ入つたやうに、榮華は、權花一日の榮に均しいやうな悲運を招いて來て、天下は、大亂に及んでまゐつた。織田が、餘り殘刻なことをすると、明智が之れを斬り殺す。明智が、惟任將軍だなど、稱して來ると、秀吉が、之れを誅伐する。豊

臣の天下が、崩れて來て、家康が、天下を一統する。家光に至つて、中央集權の名實を共に行つた。是れからして。天下太平と云ふけれども、元祿の榮華は、是れ亦、權花一日の榮であつて、餘りに尊大になつて來て、武族の困窮も、日一日と甚だしくなつて來てからと云ふものは、追々に天下大亂の階を築き出して來た。怨重なる外様の大名などは、外國事件の處置其の當を失したるを好機として、尊王論を標榜して來て、遂に徳川氏を倒して了つたのである。如何にしても、一方が重過ぎると、權衡が取れなくなつてまゐるので、チヨット何か觸ると一方が跳ね返つて來る。是れは、當然の成行であらうと思ふ。

七 權力の濫用

第二に、如何に、權衡が取れなくなつてゐたとしても、一方が、權力の濫用をしなければ、天下も、永續して行くことが出来る。權力の亂用と云ふことは、如何なる

ことであるか。政治上から云ふのと、經濟上から云ふのと、社會上から云ふのと、宗教上から云ふのと、各々其面相を異にしてゐるのであらうけれども、畢竟するに時勢の推移も顧みないで、そうして、昔ながらの特權を振り廻さうとするからして起る所のものである。

羅馬の奴隸所有主が、社會の狀態の變遷してゐるのにも拘らず、昔の通りの權威が行はれ易からざる所よりして、暴力を使用することになつて、遂には自分の破滅を招いた。藤原氏が、皇室と姻戚關係を生じて、己の地位を鞏固にしてからと云ふものは、天下は、己れの意の隨に、統御することが出来るものと思つてからに、遂に權力を濫用した。さうなると、卑下されてゐた武族どもは、沈黙してはゐないの、地方に於いて、實力を養成してゐて、王朝が式微に赴かせたまひたるを機として、追々と、亂暴を始めて來た。平清盛などは、中々の英雄であつたに相違ないが、驕奢横暴甚しかつた所からして、驕る平家は久しからずと云ふ評言を事實に現し

て來たのである。徳川氏の權力濫用は、王朝朝臣を虐遇したることを始めとして、種々なる方面に現はれてゐる。皆、反動を起す要素となつてゐるのである。何れの世でも、創業の際には、民意を酌んで政を施すのが通例であつて、それで、社會も、平穩に進み行くのであるが、世を経るに隨つては、權力濫用と云ふこととなる。今の支那を見ても分る。清朝が、此の國に君臨した當時には、國民を統一するの一策として、辮髮を強迫したやうなことをやつたけれども、其の他の事に至つては、民意を失はないやうに、餘程注意をして、政を施した事跡は、史乘に歴史と見えてゐる。然るに、朝廷の基礎が、漸次、鞏固になつて來ると、官吏の横暴が始まる。賄賂が官吏の職掌となる。四海困窮せば天祿永く終らんと云ふ格言を、事實に現はし來る階段が築いて來た。天下、既に亂階を生じてゐるのに、猶、昔日の榮華を夢みてゐて、權力を使用すること、昔日の如くしようと思ふやうになつては、天下の動亂は、起らざらんと欲すとも得べからずと云ふこととなるのである。

かう云ふ譯合であるからして、創業を距る遠ければ遠いほど、權力の濫用は、甚しくなつて来る。姑が其の子の嫁を困むるのと同じことである、新婦が、興入をした當座は、我が生みの子と同じやうに取扱ふ主義を標榜してゐて、且又、實際に此の主義を行ふのであるが、一月と立ち、二月と立ち、一年と立つて、最早嫁御寮の逃げ出す心配もなくなつて来ると、漸次に、權力濫用が起つて来るので、是れからして、他人の家へ行くと、一家の恥と云ふことも心得ないで、嫁御寮の讒訴をする。家に歸ると事につけ物につけて、窘め出す。教育ある御婦人に在つては、固より斯るはしたなき事のあるべき理窟はないが、通常の姑には、随分あることである。之れと同じことであつて、創業の日が遠ざかつて来ると、權力濫用が盛になつて来る。一家に在つては、家庭悲劇の素因となつて、社會に在つては、動亂の階段となるのである。

八 權力の行使

第三に、權力を行使するものが、常に民意を察して、時勢の推移を知つて、よく之れに順應してまゐるならば、動亂も起らないで、社會は、順調を保持して行くことが出来るであらう。しかし、時勢の推移も、民意の所在も、何にも知らないで、父祖の遺業のまゝを踏襲して、そして、迂濶に、此の世を送つて行つたならば、動亂は立に起つて来るのである。暖衣飽食、世の事情に通ぜざるものが、上に立つてゐると、かやうな現象が起つて来るのである。長安の貴公子、膏粱に長じて、米麥の生ふる所以を知らずとは、昔日支那に於いて人々の唱へた所ださうであるが、斯の如き状態の下では、天下亂るゝに相違ないのである。昔日の事は姑く之れを置くとして、清帝時代の支那は如何。滿洲政府の官吏は、氷敬炭敬など、稱する賄賂は申すに及ばず、内外京外に於ては腐敗の空氣を充たしてゐることは、公然の秘密

となつてゐる。そのみならず、昔日の太平亂にも顧みることなく、喉元過ぐれば暑さを忘れて了つて、偷安姑息で、其日其日を送つてゐる。猶、そのみならず、外國の事を處するにも、宇内の大勢に通じないで、種々なる失策を演じて、國民の怨を買つてゐるのも、更に知らないで、悠悠緩々、時勢の推移に順應して、其の態度を改めて行くことに氣付かなかつた。是れでは革命は、如何にしても、起るべき筈である。徳川氏の末路を見ても、同じことである。其の歴史には、例證となるべき事實は、澤山にあるが、長州征伐の一例を擧げて、之を論じて見よう。長州征伐の時代には、徳川幕府の權威と云ふものは、業に已に地に墜ちかゝつてゐたのである。それでも、最初の征伐、即ち尾張大納言が總督で行つたときには、面目を全うして、陣拂と云ふことになつて、一と先、各藩の兵を引揚げた。すると、幕府は、己れの權威の地に墜ちてゐることに氣付かず、又、天下の大勢が、幕府の威信と云ふものを絶滅して、家門譜代の大名までも、戦ふに意がなかつたのを知らないで、

矢張り、昔の權力を行使しようと思つて、再度の征長を實行した。是れは榮華の夢がまだ醒めなかつたので、後世の識者は、皆其の愚を憫んでゐるのである。紀伊侯が總督となつて、四方から長防を取圍んだ、其威勢は、皮相すると、甚大なるものであつたやうであるが、某藩が敗北した跡に行つて遺失物を調べて見たら、國元の妻君から、岩國縮の土産を注文した手紙が出て來たなどと云ふやうな始末であるから到底、徳川氏の爲に戦ふと云ふ精神のなかつたことは、明白である。家門譜代である、斯の如き有様になつてゐるのを心得ないで、輕忽な舉動に出たと云ふのは、畢竟、時勢の推移に暗いからのことと謂はなければならぬ。藤原氏の衰微に就いて見ても、同じ事を言ひ得るのである。藤氏の一族は、京師に在つて、驕奢に長じて、詩歌管絃吟花嘯月、ありとあらゆる快樂に耽つてゐて、地方のことなどは、更に頓着せないで、唯、一日の安を偷んでゐたのであるから、武族の跳梁を極むるに至つて周章狼狽して、最早衰勢を挽回することは出來ない時勢に立つてゐたのである。

世に文弱の弊と云ふことがある、是れ等は、皆、権力旺盛の當時を夢みるばかりで、時勢の推移に應じて、奮闘黽勉、身を立て國を興すの勇氣がないのみならず、亦、實は、偷安姑息で、時運の轉變に氣付かないのである。故に此れ等は、革命が起ると、直ちに敗者の列に入るのである。佛國革命に於ても同様の現象がある。革命は、避くべからざるの命運に陥つてゐるのに、王侯貴族は、依然として、昔日の驕奢を棄てず、財界紊亂財源枯渇して、債務は年一年に巨額に上つて來たのに、滿廷の臣僚は、毫も悟る所がなくて、財政の釐革を計畫するものが、財務の局に當ると、陰謀百出、譏誹交々至ると云ふ有様になつて、幾ならずして職務を離るゝことの已むを得ざるに至つたのである。かやうに政治が腐敗して、権力者が猶偷安姑息を之れ事としてゐるのでは、天下は靜謐で濟まう道理がないのである。貴族どもは、文弱の弊に陥つて、刷新をすることを知らないで、而も、王室の藩屏など、自稱してゐた。國王は斷頭臺上の露と化し去るやうな慘劇を生ずるに至つたのは、

誰れの罪であるか。形勢斯くの如きに至つて見ると、王室の藩屏と云ふ語は何の意味に用ひられてゐたのだか、更に分らないことになるのである。

九 社會の變調

是れに由つて之れを観ると、革命は、社會の不權衡が元になつて、そして、権力を行使するものが、時勢の推移に暗くして、其の権力を濫用することから起ると云ふ徑路を辿つて來るのであつて、かやうな有様になつて來ると、革命は實に避くべからざる現象である。言ひ換へて見ると、社會が順調を失してゐるのであるから、新なる基礎の上に、順調を回復して行かうと、かう言ふ順序になるのである。さうして見ると、権力者が、一時、社會の動亂を戡定して、之れを叛亂となして了つて、それからして社會の順調を回復すればよし。さもないと、革命は機運だに熟して來ると、直に勃發するのである。

前に論じたことを概括すると、右のやうな譯合になるのであるが、是れから推定して行くと、革命を豫防するには大略三個の方法がある、即ち第一は及ぶべきだけ社會の不權衡を止むること、第二は、權力者をして、權力を善良に行使せしむること、第三は、權力者をして、常に民意の向背と時勢の潮流とに眼を注がしむること、かう云ふ風になるのである。

かう云ふ風になつて來ると、革命の慘劇は、避けられて、社會の改良と云ふことになるのである。

吾人の欲する所は、革命に非ずして、改良である。革命は、弊害の沈澱によつて遂に避くべからざることになるのであるが、改良は、常に平和の手段によつて、知らず識らずの間に、社會を順調に向はしむるのである。之れを喩へて見ると、衛生規則に規定してある清潔法のやうなものである。此の規則に據ると、一年三回に大掃除をやるのであるが、是れは、積つてゐる塵芥を一時に掃き出すのである。革命

と同じやうなものであつて、掃除が済んで、警察官の臨檢が了ると、家内が、奇麗になつてさうして元のやうに復するのである。吾々は、毎日々々、床の下まで掃除をしてゐる譯に行かないから、一年三回位、之れをやるのは必要であらう。しかし理想から云ふと、毎日でなくつても、毎三日に一回位づゝ掃除をして、さうして毎年三回の大混雜を止めた方がよからうと思ふのである。さうしてまゐると、家内は年百年中、奇麗になつてゐるからして、別に一年三回、一日の業を休むやうな大騒ぎをしなくても済むであらう。此の方が、實は望ましいのである。之れと同じく身體に、一月又は二月位、垢をつけて置いて、一月か二月に一週に湯に入つて、半日位も費して、身體の大清潔法を行ふよりも、毎日湯に入つて、終始奇麗にしてゐた方が、健康上、望ましいであらう。社會のことも、此の理を外れないのである。平素は、時勢の變化も何にも、差構なく、安閑として、日を送つて、遂に大掃除をすることの已むを得ざるに至るは、甚、望ましからぬことであるが、平日、此の心

得がないならば、遂に革命は避くべからざるに至ること當然の趨勢である。世局に當るものは、常に、身體を清潔にすると同じく、又、家内の掃除をすると同じく、社會に疾病あるや否やに留意して、刷新を行ふの覺悟がなくては、到底、天下は、順調に進み行くものではない。諸國革命の史を緝くものは、皆、其の然るを知るであらう。社會の問題に心を注ぐものは、心せずしては、叶はぬことである。恐るべきは革命なれども、革命よりも猶恐るべきは、之れを發生する所の社會の變調である。

今は世界の亂調期

一 道德の破壊

社會の組織が變ずると道德の危機が起るのである。道德とは如何なるものであるか。その現象は千差萬別であらうけれども、國によりまた時により社會の組織を維持するに必要なる行爲が善行の根基となつてゐる。故に國が異なり時が違ふと、おのづから變遷があるのである。國と時とのみではない。場合境遇によつても同一でないことは屢ある。虚言は悪いことであるけれども、死に瀕したる親の病床に侍して、回春の期近きに在らんと言つて慰藉をなすのも虚言ながら誰れも悪事とは認めまい。これと同じく時と國によつて異なることがある。これが國體の同じからざる所と時代精神の異なる所によつて變化を生ずる所以である。我が邦の歴史を

観るに、古いことは姑く置き、明治維新前大名が各地に割據してゐた時代に、幕府や各藩が美術工藝に特別な保護を與へてゐたが爲め、巧緻精美を盡したる作品が多く市場に出でたのみならず、工藝家は衣食の途に窮することなくして十分に鍛錬を積み工夫を費すことが出来たのである。然るに封建の社會が瓦解して階級制度が急遽打破せらるゝと、状態は一大急轉を起して、工藝界は非常な危機に瀕した。これ經濟的危機の一例に過ぎないのであるが、社會組織が一大變動をなしたのであるが故に萬般の事態が混沌として收拾すべからざるに至つたのである。從來確定して動かなかつた所の道德の基礎が搖ぎ始めたのである。こゝに於いて道德彝倫地に墜ちたりとの聲は到る處に聞ゆるに至つた。しかし道德彝倫地に墜ちたと云ふ語は明治維新の際のみに生じたのではない。古から憂世憂國の士が屢々發したる所のものである。よく考へて見ると、これは社會組織の變遷に際し、舊道德が廢れて新道德がいまだ建設せられない時に發するものである。それなればこそ古から時變に際

して何時もこれを聞くのである。新道德の建設が成つて、また時勢の變遷によりこれが破るゝと、再び道德彝倫地に墜ちたと云ふことを聞かなくてはならないのである。この道德の破壊時代が即ち道德の危機なのである。この危機が現はれて新なる道德の基礎が立たない間は、社會は亂調を呈してゐるのである。

二 三種の現象

今日第二十世紀の初期は第十九世紀の末期よりして道德の危機に際してゐるのである。舊道德思想はなほ勢力を有してゐるが、極端なる破壊主義は社會の裏面に瀰漫しつゝある。凡庸の人は適從する所を知らないと言ふ状態に陥つて、世は所謂混沌である。絶對服従の義務觀念亡びて秩序紊亂の風潮が横流せんとしてゐる。人格無視の陋習破れたかと思ふと婦人の暴力運動が始る。階級制度も撤すると衆愚の妄動が起る。これを混沌と謂はずして何とか云ふ。そこでこゝに三つの現象が現はれてゐ

る。これは今日に於いてのみ然るに非ずして、社會組織變遷の時代には必ず起るものである。第一は恬淡主義である。これは實は絶望主義厭世主義であつて、社會變遷の際競争場裡に於いて落伍したものが多くこれに屬するのである。羅馬に於いて奴隸制度が廢されたのは社會組織の一大變動であるが、これと共に權勢を失し富力を亡つたものが多々あつて、世味の辛酸を厭ふに至つた。その結果恬淡主義の哲學が當時大いに權力を占めたのである。日本に於いても、敗者の地位に立つたものが身に墨染の法衣を纏つて浮世を外の生活を送つた例は枚舉に遑ない。第二は舊思想である。社會組織の變動に際して、何事も古に復さんとする思想は必ず社會の一方に存在して、新組織の建設を阻害することは史を觀るもの、首肯する所であらう。明治維新の際に封建時代の榮華の夢を忘るゝこと能はざるものもあつた。徵兵制度の實施によつて國民皆兵の主義が行はれると土氓何をかせんと唱へて、士族萬能主義の復興を夢みたる者も決して少くない。第三が破壊思想である。同じく維新の際に舊

時の状態は何事も舊弊固陋であると云つて、遂に無辜の樹木をも濫伐するのに至つた。今日に於いても舊態を快しとせざるものは皆一種の破壊精神を抱持してゐる。この三つのものを玩味するに、いづれも極端は道を得たものでない。恬淡厭世絶望これはもはや世に用なきもの、言ふ所であつて、一身を清うするは悪を行ふに勝るや萬々であるけれども、世用と云ふものにはならない。舊思想は破壊を抑止するに於いて頗る有力なものであつて過激を退めて中道に進ましむる上に於いて決して無用ではない。しかし極端に趨るものは社會組織の變遷と相容れないことになつて、遂に頑迷に陥るの外何の得る所もなくなるのである。それなら破壊思想は如何かと云ふと、頑迷を破り迷想を除くに於いて功あるべけんも、極端に趨るものは社會一般の思潮と杆格して、遂に禍害の種子を播くの外何等の效用もないことになる。社會には一種の活力があつて、時勢の變遷に促され、また時勢の變遷を促しつゝある。これは水流の如きもので、常に平準を保たんとしつゝあるので、頑迷はこれを壅塞し

て、汚水を疏せざるの恐れがあり、破壊はこれを決潰して奔浪をなさしむるの虞がある。破壊思想が決潰をなさんとせば頑迷思想がこれを抑止し、頑迷思想がこれを塞せんとせば破壊思想がこれを疏通せんとする。この相反せる作用のレザルタントとして水は始めてその中道を行くことが出来るので、これが社會の活力の動作である。

さて社會の活力と云ふものは讀んで字の如く活動するものである。それは潜勢力であつても顯勢力であつても、いづれも問ふ所でない。潜勢力の活力でも顯勢力の活力でも活きこむる以上は沈滞しては ない。必ず變遷の期が大略定まつてゐるものであらうと思はれる。世界の歴史を讀んで始めてその事實なるを知つたのであつて、世界史に顯れてゐる活力の變遷は約五百年を一期として、その度毎に道德の危機を生じ、従つて亂調時代を呈してゐることを覺つた。

三 思想の變遷

まづ西曆紀元より以前五百年の歴史を緝いて見るに、世界の思潮に一大變動を興ふべき大なる事實が現はれてゐる。この間に新なる思想の潮流が東西に瀾漫してゐる。支那で孔子の生れたのが紀元前五百十一年で、その歿したのが同じく四百七十九年で、その間齊衛陳蔡諸國を歴訪して遂に魯の本國に歸り、儒教の先祖と仰がるゝに至つた。釋迦牟尼の年代に就いては異説が多くあるけれども、その眞正覺をなしたのはこの頃に在りとして妨げずと思ふのである。波斯のツォーローアスター教の興起は紀元前八百年代に屬するけれども、その隆盛に赴いたのは同じくこの頃に在つたのであつて、猶太のエホヰ教がその起源を發したのもこの時代の事であると謂つて不可はない。

當時波斯は強大を以て四隣を震動してゐたのであるが、次いで希臘羅馬大に開け

て歐洲文明の淵源をなし、亞歷山大王東方に威を揮つて東西文明の接觸を來し、アリストーテレスの學大に興つて歐洲文明の萌芽を開いた。支那は秦の始皇天下を統一し、新思想を抑壓して詩書百家を焼き儒者を坑にした。漢天下を得、武帝が世界的政策を行つて西方との交通を開いた。その崩じたのが紀元前八十七年で、それより漢は漸次衰へて世は大變遷の幕を開いた。羅馬の共和政が亡びて帝政の成つたのが紀元前三十年であつて、その後基督教が入つて舊思想の破壊を企て、こゝに道德の危機を發生したのである。この五百年間の時期は思想變遷の第一期として可からうと思ふのである。

四 新舊思想の衝突

基督教羅馬に入つてより新舊の思想が衝突するに至つたのは固より理の當然であつて、思想はこゝに亂調を呈したのである。基督教が勝利を得て、紀元後三百年代に

コンスタンチン大帝が基督教を公許した。こゝに於いて基督教がその破壊したる廢墟の上に新道德を建設し得たのである。

この時代に支那の學問が日本に渡つて、佛教もまた支那朝鮮を経て入つたのである。佛教が入つたのは日本の共產體たる氏の制度を打破するに與つて力あつたことは推測に難からぬ所であつて、遂に政争の一因をなしたのもまた事實である。これも道德の危機を生じたことは疑ひを容れぬ所である。遂に推古天皇の詔が出て佛法興隆を合せられて、神儒佛混淆の一變體を建設的に現出するに至つたのである。紀元後五百年代の末期に、亞細亞にマホメットが出て、基督教を離れた一種の教を唱へた。これまた一部に道德の危機を現はしたのである。これが思想變遷の第二期である。

五 思想變遷の第二期

マホメットが始めてその教を唱へたのは紀元六百十五年であつて、支那の隋末に當つてゐる。支那はマホメット死去の前後の頃よりして唐太宗の世界的經路が始まつてゐる。日本では支那との交通が大いに開けて文明事業が陸續輸入せられ、佛敎もまた盛に行はれて、僧侶が文明事業を擔任して専ら開發の先驅者となつたのである。しかし社會の裏面には既に時勢の變遷の兆を呈してゐた。

歐洲はマホメットから五百年有奇の時代に於いて、ビザンチン帝國は隆盛の機運に達してゐたが西歐諸洲は西羅馬帝國滅亡の餘殃を受けて、暗黒時代の中に埋没した。これから土耳其人が回教の代表者となつて亞細亞の征服を始め、基督教と回教との思想の衝突が起つて十字軍が起る。これから歐洲封建時代の思想が熟して來るのである。マホメットの時代から第一回の十字軍が亞細亞に向つて出發したまでが約五百年あつて、これを第三期として可からう。

六 文明東漸

歐洲の封建時代にはスコラスチズムの哲學や武俠小やゴス流建築などの流行した頃であつて、おのづから一種の氣風を作り出したのである。支那は宋の世に當つて文運隆盛を極め、文士の美名歴史の面を飾つてゐた時代である。日本は藤原氏の佞佛驕奢が既にその弊害を露出して武族が權力を取るに至るの兆候を呈してゐる。これ日本國民中に既に亂調を醸してゐたのである。これから五百年許を経ると、土耳其格が全く亞細亞の西部を略取して、その文明と宗教とを歐洲の本土に移植して半月旗と十字架との架抗が起つた。土耳其人は東西の中間にその居を構へて全く交通の途を遮斷したのであるが故に歐洲人は海路亞細亞に通ずるの已むを得ざるに至り、コロンバスの米大陸發見、ブスコ・ダ・ガマの印度交通と云ふ世界史上の二大事件が出來て、こゝに文明東漸と云つて亞細亞の思想界に一大頓挫を來すべき重要なる

事態を生じたのである。この五百年間を第四期とする。

七 亂調は益々亂調

この頃よりして歐洲人は漸次東洋諸邦に來航し、その物質的文明を輸入すると同時に、思想をも亦齎し來つたのである。歐洲では大洋貿易の發達によつて頗る眼界を廣くし、從來の封建割據を以てしては到底富強の術を講ずること能はずとなし、國家の統一を謀ることを旨としたものが多い。これ等の政策を執つたものは皆富強に達することを得たのであるが、この目的を達するには封建と中央集權との衝突が盛んに行はれてゐたのである。一時亂調を來したのは觀易きの道理である。日本は葡萄牙の來航したのが天文年中であるからして足利の季世に當る、當時世は劉菰の如く亂れてゐて、亂調も甚しい亂調を來して、これより群雄中原の鹿を逐うて相争ひ相闘て天下寧日と云ふものがなかつたのである。三河より出てたる豪傑徳川家康が

遂に大望を遂げて覇權を掌握し、三代家光の世に至つて徳川氏三百年の基礎は確實に築き上げられたのである。それから三百年間の太平が打ち續いて世は靜謐であつたが、既に亂調を來すの蟲は太平の花の中に巢つてゐたので、これが外國交通の開始と共に急に發生したのである。それよりして歐米の新文明が滔々たる勢力を以て流入した。こゝに新舊思想の衝突が起つて、世は亂調を來したのである。

歐洲は如何と云ふに、これまた社會組織が資本經濟の發達と共に大變遷をなして第十九世紀の半頃よりして物論漸く稠きを加へ、現制破壊の思想は益々蔓延するに至つたのである。こゝに於いてか新舊道德の衝突は免れぬ所となつて、益々變調を醸成して來たのである。大洋貿易發展の端緒を開いてから十九紀末に至るまで約五百年の時期を経過して、こゝに危機を發生するに至る、これを變遷の第五期とする。

八 二十世紀と世界

第二十世紀の初期は次の五百年間の序幕を開いたのであつて、第十九世紀の亂調の餘を受けて、益々亂調を呈せんとしつゝある。以上の事實によつて之れを観るに思想の變遷は約五百年を以て一期を劃してゐるものゝ如く見える。第一期は東洋教の世であつて、アリストートルレスの教がその間赫灼たる光彩を放つてゐる。第二期は神佛の衝突、基督教と羅馬の古宗教との争闘で、佛耶兩教が根基を定むるに至つた。第三期は封建思想の發芽と耶回兩教の對峙とを重要な現象とする。第四期は封建的精神の確立と回教の傳播を眼目とする。第五期は國家統一の思想と歐洲文明の東漸とが著明なる事實である。これから後は經濟的變遷に伴ふ社會の變調によつて如何なる思想が確立するに至るであらうか。これは將來の事に屬するが故に豫めこゝに斷言することを得ないのであるが、第十九世紀末からの變遷に照して見れば、經濟上の強弱が處を換へんとするの争闘ではあるまいかと想像するのである。これは想像のみではない。今の思想界の亂調が切實にパン問題より生じてゐること

は争はれない。しかし經濟問題は表面に現はるゝ所の事であらうけれども、これが唯一の現象ではない。他にも講究すべき事は頗る多いのである。概して云つて見ると、前記五大時期の變遷は各部の人類を接近させる所の傾向を有してゐる。第一期に於ける佛敎然り、儒敎然り、第二期に於ける基督教然り。第三期に於ける回教然り。第四期及第五期に於いては物質的文明の進歩と與に交通運輸の便大いに開け、未開地の富源また大いに開け、人類接近の程度ますます増大し加之宗教道徳も亦影響を受けて人類を均齊するの傾向を生じた。基督教は從來宇宙人類に關して抱持したる觀念を科學の進歩と人類生活の變動との爲に變更せざるべからざるに至り、東洋の上流社會が科學の思想を養成し下層人民が基督教の感化を受け、こゝに思想の革新を促し、科學それ自身もまた演繹的獨斷的の論法臆説を抛棄して歸納論法を以て事實の真相を抉鑽するに至つて、こゝに始めて舊思想を打破し新なる普遍的な人道を建設せんとしつゝある。これ實に革命的變革なれども、要す

るに世界の人道を均一にするの傾向を有せざるはない。斯の如く人類が相接近するの傾向を生じたる以上は一國の向背は必ず他國の浮沈に影響し、一邦の變動はまた他邦の變革を促すものとせなければならぬ。生活費暴騰は世界的現象である。社會改良は坤輿に喧傳する聲である。故に余は第二十世紀より始まる五百年期の序幕に現はるゝ問題は經濟を主として社會改革の問題たらざるべからずとするのである。これが文明諸國の國民に普遍なる問題であつて、この問題の解決によつて普遍なる人道の建設を見るべきが順序であると思ふのである。

九 社會の活力

以上觀察したる所によつて、社會の活力は或る時期を定めて變體を現呈しつゝ、あることは明かである。而してこの活力の變遷がその緒を開く時期は亂調の時期であつて、第二十世紀の初期たる今日は恰もその時期に相當してゐるのである。さて社

會の活力は何によつて變遷するものであるかと云ふに、社會の體制、時代の精神がその重要なものである。

社會の體制は歴史的變遷の結晶物であつて、容易に破壊の出來ないものである。而して時代の精神と云ふものは決して等閑に附すべからざるものであつて、往々にして社會の體制に變體を生ぜしむる力を有するものである。時代精神の趨向は同一の筆法を以て體制を墨守せないのである。日本に於いて、皇室を尊崇し奉ることとは千古不磨の國體である。然れどもその方法は古と今とは不同がある。今は憲法の條章に遵由して、上御一人萬民の主義に由らなければならぬ。さもないと、皇室尊崇の主意が徹底しないことになつたのである。

時代精神と云つても、眞に時代の思想を表明したものであるか將一時奇矯を弄するものであるか。この區別を明かにしなければ、本末輕重を轉倒するの憂がある。醫者が病根の診斷を誤ると擇む所がないことになる。これ社會の裏面に潜伏する

事實を歸納的に研究し而して後始めて知るべきである。

苟も社會の改良刷新に従事せんとするものならば、社會の實際に通じて、その真相を診斷し亂脈の由つて來る所を詳悉し、然る後に非ずんば投薬は慎むべきである。世事頗る複雑にして容易に解剖を許さないかの如く見ゆるけれど、これを解剖して後にならなければ亂調の由來は明かにする事を得ないのである。社會の組織を維持するに必要な行爲が善良なる道德行爲の根基であるとすれば、社會組織の變遷に伴つて、よくその真相に適合する所の道德的標準を定めなければ、眞の道德は成立すまい。亂調は何時までとも亂調し終始しなければならぬ筈である。これでは社會の改良刷新とはならない。建設的行爲が缺けて來る。建設的行爲のないのは頑迷か破壊か極端の行爲であつて、到底水を中流に導くことを得ないのである。第二十世紀は世界の道德を一變して新なる基礎の上に建立せんとする時期を開いてゐるものとすれば、この間に在つてよく時勢の真相に通じ、中道を執つて亂調を救ふも

の果して何れの處より出づるか。第二十世紀の開始以後五百年間の變遷に就いてこれを見たい。亂調を來す所以の事實に就いては佛國大革命史が吾人に訓ふる所の一大教科書であるが、この點に就いては他日稿を更へて辯せんと欲するのである。

日本民族發展の徑路

一 日本人の發展と諸家の意見

生氣勃々新天地を得て、特殊の國家を創設したるは日本民族なり。バビロンより印度支那を経て韓半島に至り、遂に日本の國土に來りしものなるか。余は未だこれを詳にせず。フエニキアの文明に感化せられしもの印度比律賓を經由して日本に居を占むるに至りたるものなるか。またこれを知らず。事は史學研究の範圍に屬し本論の關係する所に非ず。然れども、日本民族の祖先が天より降りたりと云へる神話傳説はその波濤を超えて水天髣髴青一髮の新天地に渡來せしものたることを證するものたらざるべからず。それ然り、故に日本民族は遠征經略の民族なり。一脈貫通の結晶體を形成したる特殊の民族なり。且つやこの新天地たる、特殊の氣候風光

を有し、亞細亞大陸に密接してしかも特殊の理想性格を涵養せり。氣候風光は遠征經略の雄大なる精神、一種特別なる國家創造の主義と相觸れ相摩して所謂大和魂を煥發せり。

日本民族本來の特色に在つて、その血液今人の脈管に流通する所ありとせば、我が民族は常に遠征經略の主義を抱懷して膨脹發展をなし、しかも一脈貫通の國家觀念を維持するものたるや苟くも三千年の史變に通ずもの、首肯する所たらん。頃日米問題の起るや獨逸のレーフエントロウ伯は論じて曰へらく、

或は説をなして曰く、日本民族の植民は經濟上の事業たるのみならず、また政治上の意味を有すと。これ至當の言なり。日本人は米國の主義に混同すべき民族に非ずして、永久に日本人として存在するものたり。日本人は常に謂へらく日本人は日本國より分離すべからざるものなりと。而してこの觀念の堅固なるはその日本國外に在ることによつて徑庭を生ぜず。

將來に於ける日本の發展は日本人中一人としてこれを期待せざるはなく、その居住地の如何は問ふ所に非ず。故に外國に赴くものは皆所謂大日本を作るの基礎を作成するものならず。加州の難件やその他學校問題土地問題商業に關して起り得べき事件の意味深重なる所以は實にこの一事に在つて存す。然れども日本人のこの努力、この態度に對して不正不當なりとの評を下すは當を得たものに非ず。この特質こそ國民の偉大にして發展の能力を得るの源泉條件なれ。これ國家政事の見地よりして考量中に加ふべき重要點なる事件なりとす。と、米國のマハン提督また書をロンドンタイムスに寄せて論じて曰へらく。

或は日本人を以て容易に西洋の文明を採用し、歐米人に同化するものとなすものあれども、日本人の自負心を顧みるときは全然これを否定せざるべからず。歐米人の個人性及國民性は幾千年の長期間に發達せざるものにして、東洋人の興り知ることを得ざるものたり。歐米はかくの如くにして陶冶されたるが故に無知

無識卑陋劣悪なる歐洲人種が米國に移住するもこれを同化するに於て毫も難きと見ずこれに反して日本人の然るや否やは頗る疑を容れざるを得ず。近時日本人の進歩偉大なるは嘆稱するに足れども、歸化を必要とする米國の制度に同化すべきを期すること能はず。目下の困難は人種問題に非ず。獨逸の波蘭に對する、埃地利のスラヴ民族に對する、加奈陀の佛國人の子孫に對する、南阿のポーア人に對する、皆人種問題を以て難件とするに非ずして、民族性は實に統治を困難ならしむるの一大原因たり。米國の日本人に對するやまたこれに外ならず。從來米國は英國の制度を繼承してこれを米國化し、同種同文の民族優越の地位に在つて、異種異文の種族を風化し得たりと雖も、日本人をして今日の功績を挙げしめたる鞏固なる國民性及人種的特性を消化し以てこれを米國に化せしむることを得るや否や、大いに疑はざるを得ず。余は思惟す、日本人は純然たる外國人團を成して毫も動くものに非ず云々。

獨逸のダニユルスまた、

日英間には表面同盟條約の存立するありと雖、も裏面には東亞發展に關する利害の衝突あることを認めざるを得ず、富有にして抱負の大なる英國と貧乏にしてしかも自負心の強大なる日本と永久に和衷協同することを得るや否や疑を容るの餘地頗る多しとは濠洲、新西蘭及英領古倫比亞の齊しく認むる所たり、武斷の日本國は「今や耐忍して劍を鞘に納むれども、歐洲列國間の葛藤だに起らば起つて絶東の霸權を把握し、進んで世界の強國たる地位を取得せん」との意氣をアングロ・サクソン諸國に示しつゝあり。

と論述せり。これ等皆日本民族の膨脹發展すべきものたるも、またその特殊の國民性を抱持して動かざるものたるを謂ふに非ざるはなし、議論或は誇張に涉り、日本民族性を誤解せるものなきに非ずと雖も、日本民族が一貫の脈絡を存して進取發展の精神を有すとすの一節に至つては同意を表して不可なしと信ず。

二 日本人の海外發展

日本民族が日本の新天地を開き、膨脹また膨脹し、蝦夷肅慎を掃蕩し、三韓を征服し穢貌を驅逐し、南方に勢力を扶植したるは事昔時に屬し、軟弱政界は圖南の鵬翼を張ること能はざらしめしは千秋の憾事とす。然れどもこれ既に一場の夢たり。

死兒の齡を算するも何の益かあらん。請ふ近世の事實に就いてこれを論ぜん。

日本民族は今や大速度を以て人口の増加を來し、その率一年六十萬と稱す。到底日本の國土を以てこれを養ふことを得ず。海外發展の策また已むを得ざるなり。

海外發展の最著大となりしは一八九二年北米合衆國が支那人の移住を禁ぜしより以來のこととす。當時米國に在住したる支那の苦力は頗る低廉なる勞賃に安んじ、白人の願使に甘んじたれども、日本の勞働者は權利の思想に富みて、經濟上これと拮抗するの甚だ困難なるを覺え、同年の如きは移民の數僅かに三千を算するに過ぎ

ざりしなり。然るに支那人の移住止んでよりは移住着々その歩武を進め、一九〇〇年に至つては二萬九千七百五十六人を數へ、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン、モンタナ、ネワダに居留せり。この時に當り、移住外人のこの諸州に在りしもの二十七八萬人たりしを以て、日本の移民はその約十分の一を占めたるなり。而して日本の移民は勤勉節約勞賃を貯蓄して、漸次中流の社會を形成し、商業の經營宜しきを得て土着の商賈を壓倒するの形勢を呈するに至り、支那人が徹頭徹尾苦力の賤役を以てみづから甘んずると日を同じうして語るべからず。こゝに於いてか僅々三萬弱の移民すら猶且米人の嫉忌を買ふに至り、一九〇一年合衆國會は日本人移住禁止法案を通過せんとするの舉に出でたり。

日本政府は旅行免狀の規定を設けて、事實上無資産者の渡航を止むるに至れり。雖も、移住は絶ゆることなくして、遂にその數を倍加し、前記諸州の外英領古倫比亞もまたその侵入する所となるに至れり。米國人は日本人及朝鮮人排斥同盟會を起

し、尋て一九〇六年學童問題の發生を見たり。皆日本人の發展を恐るゝの結果に外ならざるなり。爾來日本政府は隱忍自制以て事を處し、移民を抑止して米國に好意を得んことを努めたれども、移民は依然その跡を絶たずして、一九一一年歸化權を有せざる外國人の移住を禁ずるの法案を現出するに至り、恐日病は蔓延傳播し、上院議員中マダレン灣占領の風説に就いて公然政府に質問を發するものあるを見、風聲鶴唳噴飯すべき舉動の行はるゝを目撃したり。土地法案の通過はまたその餘響と謂はざるべからず。

米國に於ける日本移民の嫉忌せらるゝことかくの如きより海外發展の趨勢は旭日昇天の勢あるが如き觀を呈しきと雖もその實を觀察するにかならずしも然らず。一九〇七年日米移民制限の約束を交換してその抑止に努めたりしより以前に在つても、その甚だしく多數に上れるを見ず。一九〇六年は戰役の餘波經濟界に及んで、移住の數最多きを見たりと雖も當年故國を去りしもの僅かに五萬八千餘人に過ぎ

ず。その後漸く減じて一九〇九年には一萬五千餘に出でざるに至れり、しかも移民中歸國の途に上りしもの少しとせず。

一九〇七年は日本政府が米國及布哇に移住することを禁じたる年なり。これに代るべき恰好の移住地を屬邦または勢力範圍中に求めんとするは日本人の執るべき當然の事業に屬すれども、如何せんいまだ十分にその効果を呈すること能はざるを。

一九〇九年の統計によるに、臺灣朝鮮樺太廣東南滿に移住せしもの僅かに一萬八千人にして、これ従來の居住民に合して三十萬七千餘人に過ぎず。日本民族を驅つて大いに海外に發展せしめんとするの計畫が十分なる功績を奏すること能はざりしは今日に至るまでの事實にして、將來に於ける事態如何はおのづからこれ將來の問題にして、今日に於いて確乎たる斷案を下すを難しとす。況や黃禍説の傳播と恐日病の蔓延とが幾多の障礙物をこの間に挿入せるに於いてをや。

三 日本人の海洋發展策

然れども日本民族は膨脹の民族なり。發展の民族なり。況や人口の増加と經濟の壓迫とはこれを驅つてその必要を感じしめ、國民性の特質を發揮するの機會を促進しつゝあるをや。

この際に當つて、日本民族發展の範圍を論ずるもの出づ。第一を海洋發展論とす。これ具體的に云はゞ太平洋覇權論なり。これ果して何の意を寓するか。漫然太平洋上の權力を把握すること能はずして、かならずやその權力を維持する所の根據地なくんばならず。地圖を按ずるに、太平洋上には比律賓群島、布哇群島、グア島並にサモア群島中のテウ、テウイラあり。皆その用に供すべきものなり。而してその日本に屬せざるを奈何せん。比律賓群島の日本に重要なるは言を俟たず。日本國民がこれを以て將來の領土な

りとせしは由來尙し。然るを合衆國が咄嗟の間にこれを占有するに至りしは世人の意外とせし所ならん。今日にあつては未だ日本人をして危険を感ぜしむるに至らずと雖も、近き將來に於てパナマ運河の開通するありて、米國が群島中の要所を選んで港を開くことあらば、その時こそ日本の受くべき經濟上の危険は實際に發現すべし。政治經濟軍事の上に於いて合衆國が日本の競争者となり得るはこの根據地ありて始めて然るなり。故に群島の氣候風土米國人に適せずして日本人に宜しきに拘らず。合衆國はこれを保有して以て亞細亞海岸附近に於ける根據地となせるなり。布哇群島は太平洋の中心に羅列して合衆國の前哨たり。その合衆國に併合せらるるや、日本が抗議を提したるは如何にその必要視せられたるかを窺ひ知るに足らん。今日布哇に在住するもの、土人及白人は僅少の數に止まり、支那人二萬餘にして日本人は實に入萬の上に出でたり。一旦戦争の破裂するありて、日本が干戈を太平洋上に交ふる時に當つて、日本の先づ占領すべきはこの群島と比律賓なるべし。

テウーテウイラはまた合衆國の最重要とする所にして、實に太平洋上に於ける海軍の策源地たるの地位を有す。故に合衆國がこの地を失ふときは海上に於ける軍事上の根據地を奪はるゝのみならず、軍事政治の兩方面に於いて南太平洋の勢力を失墜するに至るは瞭然たり。これに反して、日本よりこれを見るときは、テウーテウイラ島は太平洋上に於ける日本の勢力を保障するの位置を有するが故にこれを得て以て合衆國に對する前衛とするの最必要の事とすべけん。今やこれ等の諸地は日本の海洋發展上重要な地位を占むるものなりと雖も日本は非常なる手段を取るに非ずんばこれを其手中に收むることを得ず。然れども膨脹せんとする發展せんとする日本民族が必要上取るべきの手段はこれを措いて他になし。海上の日本を作つてその發展を完全にせんとせば、北亞米利加より南亞米利加、濠洲に至るまで太平洋の海岸に系統的なる日本移住地を作らざるべからず。特殊の國家思想を有する日本民族を以て太平洋の沿岸を包圍周繞するに非ずんば海上發展

の實を擧ぐるを得ず。而してその手段として必要とする所は根據地の地盤を固うするより外なきなり。

海洋發展は出來得べくんば吾人の實行せんと欲する所なり。何を以てこれを言ふ。太平洋沿岸の地並に島嶼中日本民族の膨脹發展據守移住せんとする所は概ね皆熱帯亞熱帯と温帯の圈内に屬し氣候温暖にして、風土最もよく日本人に適し、經濟事業に於いて勞力と報酬と相償ふことを得べく、膨脹的なる發展的なる日本民族の據守移住すべき好個の樂土たり。嘗て勢力を安南暹羅東滿塞に扶植し、比律賓に西班牙と鹿を争ひ南洋一帯の地を我が掌中に收めんとするの概を示したる日本民族は鎖國三百年間の迷夢に耽溺せざりしならば、かならずやこの徑路を履んで膨脹發展せしや疑ひを容れず。今や太平洋上の寶庫は既に我が有に非ず。所謂非常なる手段に出づるに非ざるよりは、焉ぞこの徑路を行くことを得ん。非常手段或は易々たらん。然れども困難のこれに伴ふあるを如何せん。前記のダニエルス論ずらく、

日本帝國は國債と米とのために外國に對して多大の債務を負ひ、經濟上アングロサクソン國民の奴隸と化し去れり、その米國と干戈を交ふるに至らざるは新に勢力を得たる階級の利益と金錢とのために外ならず。

と。米國のセイツまた
東洋の人口年々歳々増加し來り、將來漲溢して各方面に流出せん。勢こゝに至らば、黃人の範圍内に振作せる白人の權力を壓倒せらるゝの命運を免れず。而して今日日本が開戦を欲せざるは負債は償還し商工を獎勵して、自己防衛の任に當るべからざるに由る。日本は何の餘裕あつてか戦ひをこれ事とせん。

と述べた。レーフエントロウもまた論述して
太平洋の東岸日本人民の包圍する所となるに至らば、政治軍事の兩方面に於いて重大なる現象を呈し來るべく、その結果太平洋に濱する諸國は多大なる危險に陥り、合衆國もまたその數を免れず。然れどもこれ中道に多大なる障礙の起らざ

る限り日本の行くべき徑路なり。障礙とは何ぞや、日本經濟財政共に危殆に瀕せるとその財務上外國殊に英國に倚賴すること多きに居れるとはこれなり。と云へり。皆日本が經濟財政の困難に陥りて、宿志を遂ぐることは能はざるを論ぜざるはなし。これ或は然らん。然れども金錢を浪費して戰爭をなすのみを以て唯一の手段となすは日本の取らざる所、經濟的膨脹、經濟的發展、また膨脹發展の要件なり。何ぞかならずしも兵力にのみこれを訴へん。

然りと雖も經濟上の膨脹發展また幾多の障礙に逢着せり。米國に於ける日本人の膨脹發展既に妨害せらる。墨其士哥の移住また米人の嫉視する所となり、南米の移住今や歓迎せらるゝが如しと雖も人口稀薄なる時期に止まらん。濠洲は排日論盛にして我が立脚の地を得しめざらんことに汲々たり。勢既に然り。我れにしてなほ海洋發展の策を樹てんか、歐米の列強相連衡し相提携して壓迫を加へ、黃禍の蔓延を阻遏してしかも白禍の襲來を促すに至らんは明白なり。然れども海洋發展が日本

民族の最利とする所にして且つ宿昔の素志に基くものたりとせば、時機にだに遭遇せば事のこゝに至らんは論理上必然の結果なりと謂はざるべからず。時機とは如何。歐米列強が相連衡提携して白禍を我れに及ぼすこと能はざるの時なり。その期の悠久に渉るべきや否やは歐米の實狀を知悉するものに在つて始めてこれを明白にするを得ん。

四 大陸方面の發展

海洋發展は必要かくの如くにして、而も實行の困難なるまたかくの如し。然らば則ち萬事休すと言ふべきか。決して然らず。今や合衆國は亞細亞大陸に向つてその歩武を進めんとしつゝあり。日本は自己の權力を保守し強國たるの地位を維持せんとせば、勢これと角逐せざるべからず。故に大陸に覇權を伸張せんとするは日本の取るべき當然の方針なり。一九一〇年合衆國外務長官ノックスが滿洲鐵道中立論を

唱へて世界の耳目を驚動せしめしが如き日米間の政治的衝突を示すものにして、今日に於いてもこの暗闘の繼續を見つゝあるは事實にして、支那の紛擾のために爪牙を隠蔽せるのみ。

想ふに支那に權利を伸張せんとせば、日本は島國としてその歩を止むること能はず。日本海の附近及黄海に於いて海權を制するの必要あるは論を俟たず。これを得んとせば朝鮮に據つて以て列強の南進を防遏するの外に途なし。これ既に日露戦役の結果として日本の目的を達せし所にして、露國は支那經營策の一部を挫折された。こゝに於いてか滿蒙に於ける發展は起りぬ、蓋し當然の結果なり。

地志を繙閲するに南滿東蒙の地沃野廣漠、耕作に適するの地積は日本に倍す。過剩の人口をこゝに移し、墾拓に従事せしめば需要過多供給不足の憂を免るゝことを得ん。且つや太平洋上の發展は列強の拮抗競争多大なるに反し、日露が利權の分配を確實に約束したるや否やの問題は姑く措き、今日に於いて露國の境を接する外こ

の地に於いて激烈なる列強の抗争を見ずして已むことを得べく、發展膨脹の困難は大にその度を減ずべきや明かなり。故に論者中海洋發展策を第二位に置きて大陸發展策を第一位に居らしめんとするもの多きこれ一理あり。

然るにこれに反對するものは謂へらく、東蒙南滿地味肥沃にして、優に移民を容るゝの餘地存すと雖も、氣候酷烈にして冬季は耕地探鑛を許さず、況や露國は境を接して脾胃動輒我が行動を牽制せんとするをやと。また謂へらく、大陸發展は軍備の擴張を必要とするが故に經費の膨脹を來し、さらでだに人民を塗炭の苦に陥れんとする我が財政策をして一層の困難を感ぜしめざるを得ずと。

これ或は然らん。然れども大陸發展に關して當然逢着すべき一大困難あるを忘るべからず。支那人の競争これなり。既に上文に陳述せし如く日本人の米國に移住せしもの支那人移住禁止以前に在つてよくこれと競争せしもの幾人ありしか。故に米國に移住する日本人の増加せしはその以後に現出せし事實たり。支那人の怒るべき

經濟的競争者たるはこの一事を以てするも明かなり。今や南滿東蒙に於ける日本人發展の狀態を觀察するに、支那人の競争に堪ふべきや否やはなほ疑問に屬す。上文にも略陳せし如く、一九〇七年米布に代ふるに滿韓を以てして移民を輸送せんとしたれども、一九〇九年の統計はその數三十萬人餘を示し、しかも在留外人の數はこれに匹敵せり。滿洲に於ける發展もまた幾多の困難に遭遇せざるべからざるや瞭然たり。こゝを以て大陸の發展は支那人の競争を壓倒するの範圍を以て限界とせざるべからざるに至らんを保し難し。

五 千歳の悔を貽す勿れ

海陸發展共に進むべきの徑路はおのづから一定せり。これを防遏すべき障礙も亦現然たり。徑路既に定まれりとせば、特殊の國家組織を具備せる膨脹的發展的日本民族はこの徑路を辿つて膨脹發展すべきや明かなり。障礙既に現然たりとせば、こ

れを破ると破らざるとによつて進路の限界は定まるなり。これによつてこれを觀るに海洋發展は歐米列強の抗爭を防遏するを以てその實施の時期とすべく、大陸發展は支那人競争と露米の睥睨を壓伏すると否とを以てその實行の限界とすべく、その以上は日本民族の最も適當なりとする所を以て膨脹發展の地たるべきなり。適當の見地よりせば海洋發展を以て優れりとすべし。これ前述の事實によつておのづから明かなるべく、たゞ時機の到來何時に在るかを詳知すること能はざるのみ。然れども大陸發展を以て不可能とするに非ず。たゞ氣候風土と土人の競争とを壓するの身體精神を養成するの必要あるのみ。

若し夫れ一切の發展膨脹を中止して自衛の途を講ずるに止めんとするは日本民族の固有の精神に悖戾するのみならず、遠征經路膨脹發展の必要を無視するものたり。鎖國政策によつて千歳の悔を貽し、同一の轍を履むものたり。これ余の取らざる所たり。況や列強は汝取らずんば我れ取らんの政策を踏襲せるをや。